始

自序

門氏教育法の長所は其の實際的方面にあり、故に縱令理論的に不徹底の點ありとするも、そは煩を及ぼすに足らず。實に其の實際的方面に於ける、イター・セガンが四十年間の實地研究を基礎とし、更に女史が異常兒並に普通兒教育時代を通じたる十ケ年の經驗を積みて築き上げたるものを「モンテッソリー教育法」とす。其の一片机上の空論ならざる所に千鈞の重みあり。

初め「モンテッソリー教育法」の世に傳はるや、余は唯時代の新思潮なるが爲、單に好奇心の驅る所となりて、之が英譯を繙けり、而して讀むこと三・四十頁、其の研究の眞面

目なるに驚き、愈進みて益標を正すを禁せず。再讀三讀此の書の如く余を刺衝し、啓發したる事なきを感じたり、爾來歐米學者の評論を漁り、讀むこと實に十有餘種に及び、愈其價値あるを明かにし、此の方法の一日も早く天下に紹介せられんことを希ひ、倉皇一書を著して『モンテッソリー教育法と其の應用』を發刊せり。然るに此の書は專ら力を其の應用方面に注ぎたるを以て、紹介を粗略にしたるのみならず、研究の日尚淺かりしが爲に、間其の美點を逸したるもの尠からず、爾來專心之を研究するに及び、愈其の根柢に横はる美玉あるを發見し、我が同好の士に其の眞髓を紹介せんとの念禁ずる能はざるものあるに至り、此に稿を更むること數次、漸く其の志に叶ふを得

たりと信ずるに至れり。

然るに原著は秩序整然、一絲亂れずといふが如きものにあらず、故に部分部分に捨て難き妙味あるにも拘らず、反つて大體の理脉を辿り難きもの尠からず、或は婦人の得て免れ難き諄々重複せるものあり、或は語足らずして脈絡聯結し難きものあるを免れず、されば余自身に於ても其の眞髓を捕捉し得たりと確信するに至れるは、實に反復玩味の後なりき。　茲を以て本書を講述するに當り、特に大意の捕捉し難きものには、豫め全章の要旨を述べて理脉を明かにし、間其の煩雜なるものを省くと同時に、其の足らざるを補はんが爲、標註或は註脚を施したること頗る多し。然りと雖も之が爲に女史の眞面目を損す

ること無きは、斷乎として確言するに躊躇せざる所なり。唯、評論解說餘りに親切に失し、讀者の想像・推理を妨ぐるの嫌なきにあらざるも、之に依りて了解を確實にするものあるべきは、私かに誇りとする所なり。唯、讀者諸君は、余の評論解說に捉はるることなく、門氏教育法の深底に潜める珠玉珍寶を發掘するに成功せば、眞に斯界の慶事と言はざる可からず。

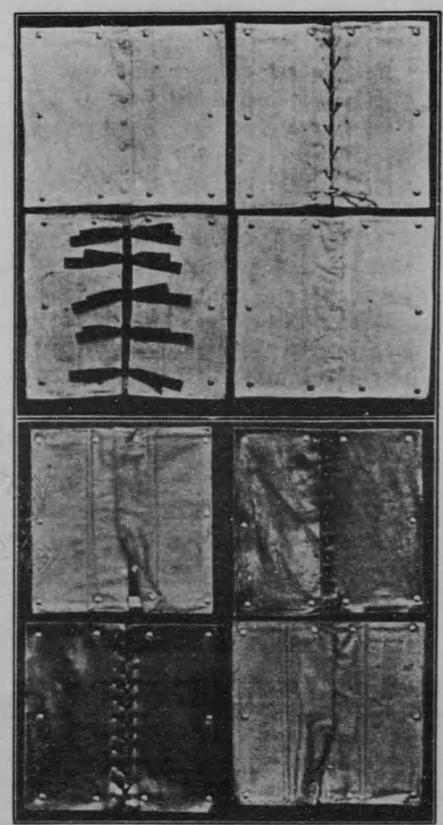
本著を講述するに當り、教育時論記者内丸輝吉氏が筆記校正等多大の助力を供せられたり、茲に記して其の厚意を謝す。

大正四年七月

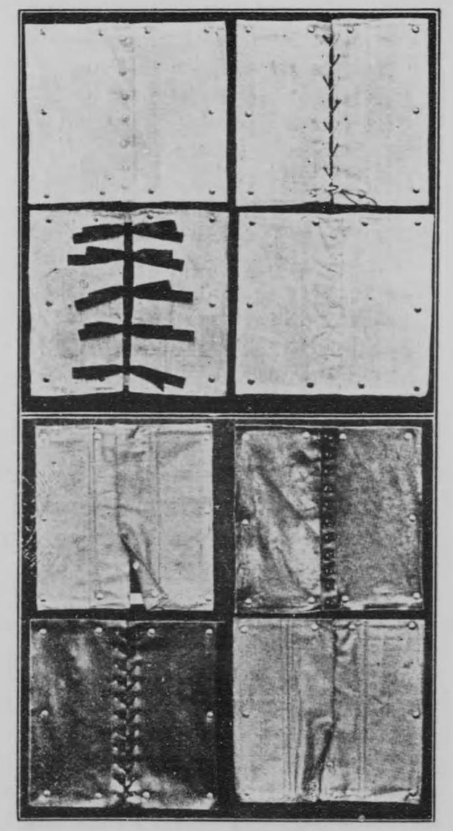
駒込の寓居にて　著者誌

モンテッソリー教育法眞髄目次

モンテッソリー教育法眞髓目次終



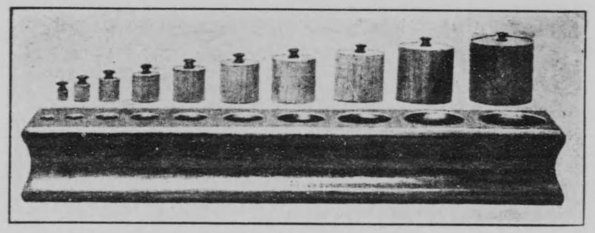
指頭練習
（教育的體操の一部）

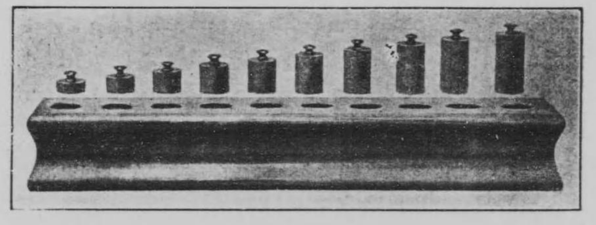


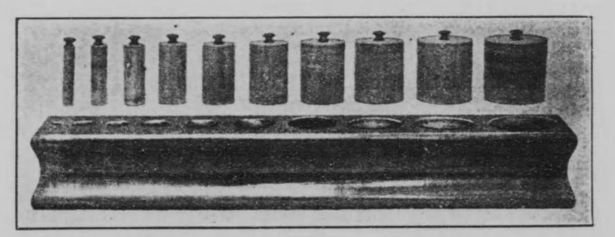
指頭練習
（教育的體操の一部）

目次

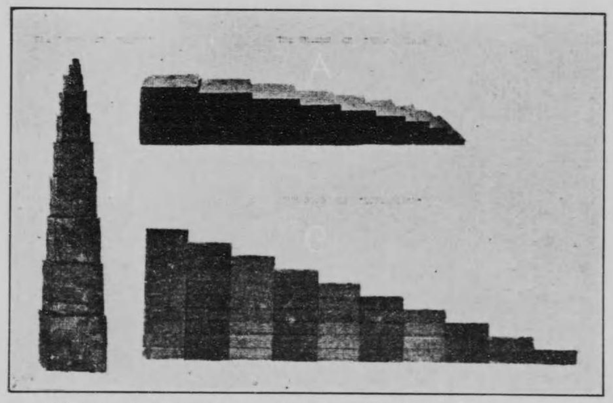
モンテッソリー教育法眞髓目次終



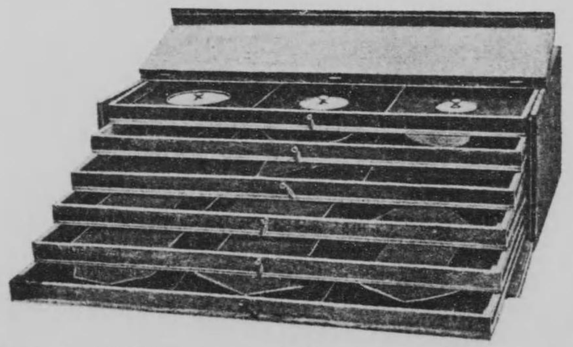




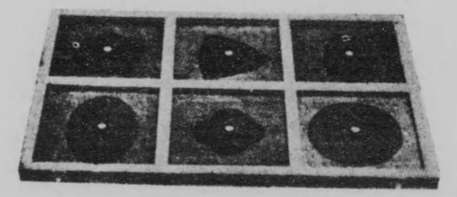
分銅　嵌　（視覺練習の一部）



（棒數計名一）階段長C　塔方B　階段大A



（のもるため納に箱）　篏　板　型

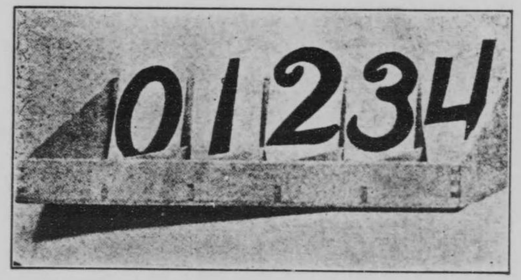


篏　板　型

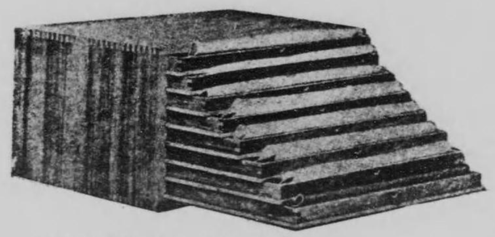
幼兒の手績

憶記の形字

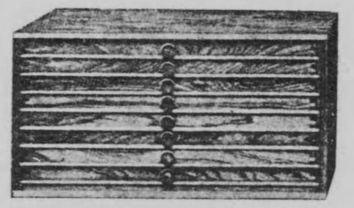
立組の詞



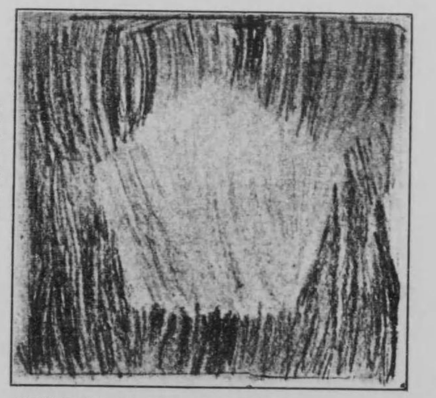
箱　數　計



（所るたき開）箱習練覺觸



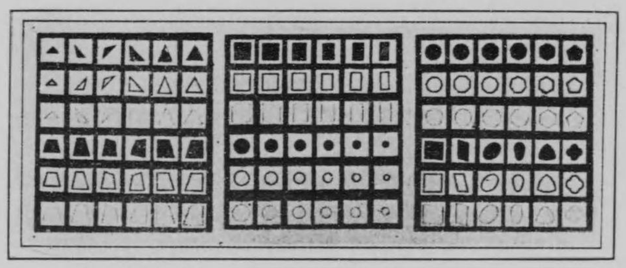
（所るたち閉）上　同



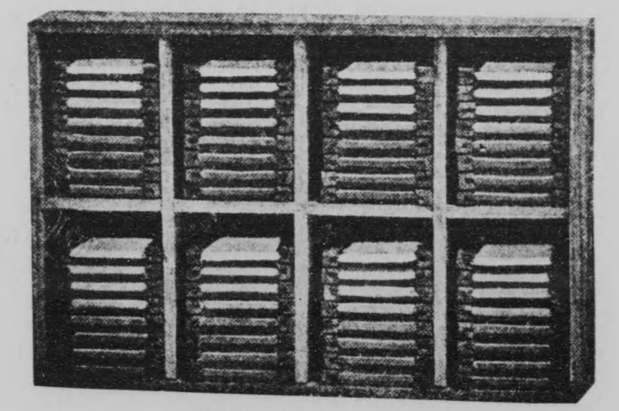
（授教方書）案圖習練筆用

（第十七講參照）

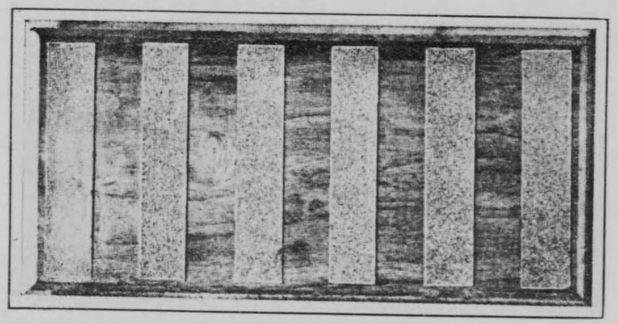
モンテッソリー女史

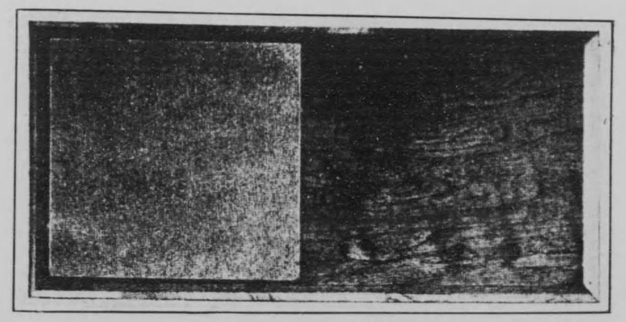


ドーカ用習練覚視



卷　糸　色





觸覺練習板

九月　童の　絵

宣教師の音頭

モンテッソリー教育法眞髄

文學士　河野清丸著

第一講　新教育學と現代科學との關係に對する批評的考察

門氏の本著を發刊したる動機

モンテッソリー女史が、其の著「モンテッソリー教育法」を著はした動機は、之によりて科學的教育學を建設せんとするの意志ではなく、只其の親しく經驗せる所を述べ、之によりて諸科學の原理を教育學上に應用するの道を開かんが爲である。而して下に述ぶる醫學・心理學・人類學等は、最近の教育的活動を革新せんとする傾向を有するものなりと述べて居る。

『最近十年間に於て、醫學の方面より教育學を論ずるもの次第に多くな

り、又ウェーバー、フェヒネル、ヴントを經て一新科學に組織せられたる生理的若くは實驗的心理學は、新教育學の重要なる基礎をなして、所謂新心理學の新教育學に對するは、猶形而上的心理學の哲學的教育學に對すると同一の關係を有するに至りたりと論じ、然のみならず、人類學は、兒童の身體的方面の研究に適用せられて、是亦新教育學に有力なる要素を提供するものなり』と。

新教育學の曙光

勿論今日に於て、上述の諸科學が遺憾なく應用せられて、科學的教育學が完全に構成されたる譯ではないが、第十九世紀の思想界を一新したる實驗的科學に依りて、教育學は漠然たる雲霧の中より救ひ出されねばならぬ、と言つて居る。

以上の如く教育學は到底從來の如き哲學的の舊套を脱して、徹頭徹尾科學的に研究さるべきものなりとは、單に女史一己の考のみならず、最近伊太利に於ても其の他の歐米諸國に於けるが如く、教育學を純粹科學的に建設せんとする革新運動は中々猛烈である。（教育學は純粹科學的研究のみにて建設さるゝのみならず、殊に其の目的論方面に於ては、哲學的研究に基かねばならぬのである）

本講の要旨

一、伊太利に於ける教育革新運動

二、教師の精神修養

三、兒童研究と自由主義

斯くて女史は、伊太利に於ける教育革新運動を詳述してゐるのであるが、序ながら豫め本講（本書第一講にして門式教育法の第一章）の要旨を述べて見るならば、

第一、伊太利に於ける教育革新運動を詳述して居る。然るに伊太利はロンブロゾー、ギニオバニー、セルギー等人類學者の影響を受くる事大なるが爲、教育學上に於ても身長・體重・頭圍等の測定に要する教育上の末枝を偏重する傾向盛なるが爲、女史は其の反動として教師の精神的修養を高調し。

第二、教師の有すべき精神の内容（即ち眞理の憧憬・犧牲・献身の德・無邪氣等）に關し例を擧げて反復詳説し。

第三、教師は科學的精神を以て、被教育者を科學的に系統的に研究し、以て科學的教育學を建設すべきものであるが、之が爲には兒童に自由を許

四、自由主義と賞罰

五、兒童の內部生命を開展せよ

伊太利に於ける教育學革新運動

第一セルギー氏と新教育學

して赤裸々に其の眞相を表示せしむべきの要を說きて、或は机・腰掛を呪詛し、或は文化の發達と自由の增進は相比例すと說き、現今學校の教育に於て兒童を束縛するは、文明の趨勢に逆行すと罵り。

第四、自由と賞罰の關係を論じて、賞罰は精神に對する机・腰掛(束縛の具)なりと喝破し。

第五、人類の勝利と進步とは人間內部生命の開展による。而して內部生命(inner life)の開展は、心身の自由を與ふるの外に道なし。と論じて本章を終つて居るのである。以下之を逐次詳論して行くことにしよう。

伊太利は人類學研究の盛なる國であつて、就中其の代表的學者が三人ある。ロンブロゾーは罪人人類學を以て、デ、ギオバニーは醫學的人類學、セルギーは教育的人類學を以て顯はれて居る。モンテッソリー女史にも亦「教育的人類學」といふ大著がある。

セルギー氏は其の教育的人類學を基礎として、新教育を建設せんとした。茲に於て氏は今世紀の劈頭「科學的教育學校」を設立し、新教員を養成せんとした。伊太利全土の教員達は千里を遠しとせずして雲の如く集まり、ミランは進んで科學的材料の立派なる裝置(splen did equpment of scientific material)を寄贈し、斯くて其の設立當時は旭日登天の勢を示し、此の校の實蹟に依りて、「人間を造る科學」を建設することを得ると一般に信じられたのである。

被教育者の系統的研究

是れ偏にセルギー氏の努力に因るものであつて、氏は三十年以上教育に基きたる新文明の原理を、伊太利の教師間に普及せしめんが爲に、最も熱心に運動した人である。氏曰く『現代社會に於て最も焦眉の急を感ずるは教育法の改造にして、之が爲に戰ふものは人類再生の爲に戰ふものである』と。

氏は「教育と教授」といふ書を著し、此の望ましき再生に達するの道は、教育的人類學並に實驗心理學を手引として、被教育者を心身兩方面より、系統的に研究する事であると述べ、更に曰く、『數年間余は人間の教育教授に關する觀念に對して爭つたが、益々それが正當にして且必要なりと思は

るゝより、愈〻深く之を推究した。惟ふに合理的方法を建設せんとせば、多數の個人を精密に又合理的に觀察する必要がある。而も教育の基礎は幼時に固められるものであるから、其の觀察は主として人生の初期に限るのである。尤も單に人類學的測定即ち頭や身長を測る事のみを以て、教育學の系統を建設することの出來るものではない。勿論教育者が一個人を教育せんとせば、其の個人々々に關して、明白直接なる知識を有せねばならぬから、此の人類學的測定は科學的教育學に達する有力なる、筋道の一たるは爭ふべからざる點である』と。

個人系統的研究とは人類學測定に限るの謂にあらず

要するにセルギー氏の考は、教育者は被教育者の一人々々を系統的に研究して、其の個人に關する事は細大漏さず熟知して居なければならぬ、と主張するのである。所謂系統的とは何を意味するかを明言して居ないけれども、人は心身の二部より成る事は事實であるから、醫學・人類學・實驗心理學等に依りて、其の心身の兩方面を精密に觀察し、實驗するといふ意味であらう。

被教育者の系統的研究とは何を意味するか

門下生の誤解

現今教育の一大弊竇は劃一的沒個性的なる點にあるを思へば、氏の主張は大に味ふべきである。

併しながら氏の思想は其の門下生に依りて誤られた。蓋し或者は師說を餘りに文字通りに解釋し、他の者は之を誇張し過ぎたからである。而して其の主なる誤解は、生活の實驗的研究其の物と、其の教育其の物とを混亂したる點である。尤も前者は後者に到達する道筋であつて、其の實驗研究より其の教育は自然的に、又合理的に發展するものであるから、門下生は實は教育的人類學に過ぎないものに對して、直ちに之を科學的教育學と呼んだのは恕すべき點無きにしもあらざれど、誤謬は矢張り誤謬に相違ない。

されば是等の革命家は兒童の身體調査表（バイオグラフィカル、チヤート）を掲げて其の旗幟とし、教育界の戰場に此の旗幟を押立てたならば、勝利は必ず自分に歸するものと思つた。

斯くて「科學的教育學校」は、教師に人類學的測定法「エステシオメーター」

セルギー氏の功績

の使用法、心理學的材料の蒐集等を教へ、以て一群の科學的教師を造り得たりと信ずるに至つた。

然れども輓近英佛殊に米國に於ては、初等學校に於て人類學・心理學に基きたる實驗頻々として行はれ、是等科學の力に依りて學校を改造せんと努めつゝあるを見れば、這は世界の一大新思潮とも見るべく、伊太利が其の大思潮に後れを取らざりしは、確かにセルギー氏の賜であるとモンテッソリーは述べて居る。

尤も是等實驗に直接手を下したるは醫者であつたから、それ等の結果を組織し、以て久しく翹望せられて居た科學的教育學を建設するまでの運びには行かなかつた。尚又教育實驗家即ち教師は、醫師の成す程巧に是等實驗を爲す事が出來なかつたから、是れ又科學的教育學を構成する事が出來なかつたのである。

要するに新教育學は、實驗に巧なる科學者と教育實際家との力に賴らねばならぬ。此の點に於てセルギーの計劃は不成効に終つた、從つて之に鑑みて現はれたる、第二の革新家が出て來る事になつたのである。

第二クレダロー

此の教育革新の目的を達せんが爲にクレダロー氏は大學内に教育學研究部を附設した。其の目的とするところは、從來單に哲學の一分科と見做されて居た教育學の地位を高めて、確實なる一科學たらしめんが爲に、教育的衞生學・教育的人類學並に實驗心理學等の比較研究を爲し、以て斯學を研究せんとしたのである。

伊太利教育學の特徴

伊太利教育改新家の斯學に對する貢獻

伊太利に於ける教育革新運動は、大體上に述べた如くである。ロンブロゾー、ギオバニー、セルギー等第一流の人類學者が輩出して、大に學界を風靡したるが爲に教育學亦其の影響を蒙る事が尠くなかつた、門氏は亦之を以て伊國の誇として居る。

女史は之を以て新教育學を完成したものとは勿論思はない、然れども此の革新運動其の物が、世界の民人に對して思索の門戸を開いたといふ點に於て、人類社會に貢献する所尠少ならずと論じて居る。實に思想上に國境の別なく、全世界は全然一家であるから、伊太利に於ける革新運動

が縱令不成効に終つたとしても、世界の文化に貢献せんとするものは、全文明社會より人道的尊敬を拂ふの價値あり、とて一大氣焔を吐いて居る。今此の論旨を例證せんが爲に、アシシーの聖者セントフランシス(基督舊教の僧が最初は神の託宣を誤解して居たけれども、遂には其の神意の在る所を完成したといふ事實を擧げて居る。

フランシスは夢幻の裏に基督を見て、其の貴き唇より『フランシスよ、我が教會を再建せよ』との託宣に接した。フランシスは教主の所謂教會とは、當時氏が朝夕禮拜して居る小會堂の意なりと誤解し、直ちに自ら石を運んで先づ其の崩壞せる壁より改築し初めた。然るに神主の眞意は、清貧の精神に依りて加持利教(耶蘇舊教)を改造せよといふにあるを悟つた。(舊教にては清貧を貴び、富者の天國に入るは豚が針の穴を通過するが如しと言つて居る。然るにフランシスは其の綽號をFrancis The povertéと呼び、清貧に安んじたるを以て有名なる聖者である)。果せる哉、氏は後殆んど奇蹟的に一般民衆を濟度し、其の精神(清貧なる)の一大勝利を遂げたる

(註)聖徒フランシスが最初は神の託宣を誤解して居たれども、後遂には其の眞意の在る所を完成したるが如く、教育の革新者も亦最初は誤る所あるもの、其の志を完うしなるべし、とのを遂ぶ

大改革者的高僧となつた。されば伊太利に於ける教育革新運動も縱令誤解と失敗とに終れりとするも、全世界の後進を刺衝して改善の歩を進める事が出來るとして、女史は次の如く言つて居る。

『吾等も亦セントフランシスの如く、實驗研究といふ堅くして無感覺なる石を、古き崩壞せる校壁に運ぶ事に依りて、學校の改築が出來るものと信じて居る。吾等は亦物質的機械的なる諸科學が、我が新教育學に提供する助力は、恰もフランシスが自ら其の肩に運びたる四角の花崗石其の物の如く、改造上餘り効力なきものと見做すのである。斯くて吾等は誤れる狹き道に迷ひ入つたのであるから、早く本道に出なければならぬ。然らざれば將來の人間を教育する、眞正にして生きたる方法を建設する事が出來ないからである』と。

要するに伊太利の教育革新運動は、測定實驗といふ末枝的方法に走り、却つて教育の精神を度外視したる傾向が明かであつて、女史の大に不滿足を感じたのが、正に此の點にある樣に思はれる。そは女史が、科學的技

(註)女史が教師の精神を重んずるは伊太利最初の教育革新家が技術即ち教育の末枝を高調せる

反動なり

科學的技術と科學的精神の差

術と科學的精神との差」といふ項を設けて大に精神の重んずべきを力說し、方法の末に馳するの弊を極論せるに依りて明白である。今之を次に述べよう。

教師に人類學・心理學等の實驗科學的知識を修養せしむる事の容易の業ならざるは勿論であるが、而も勞して其の効果は比較的大なりとは言へない。蓋し單に教師を實驗の出來る機械と成すに過ぎずして、剩へそれが果して實用に適するか否かも問題である。

由來舊式の教師は主として哲學的素養を重んじ、自己の尊信する哲學者の觀念を了解せん事に努力し、口を開けば其の哲學を祖述し、其の學說を讀まんが爲に其の目を動かすのである。之に反して現時の科學的教師は、某々實驗機械に親しみ、且是等を使用せんが爲に、手や腕の筋肉を動かす方法を知れるに過ぎないのである。

上述の如く、新舊兩種の教師は互に兩極端に馳せて、其の間隔一見頗る大なるが如くであるが、而も哲學的教師と實驗的教師との差違は、決して

教師は科學的精神を養はざる可からず

（註）教師の養成上には技術よりも精神を重んぜよ

根本的ではない。蓋し根本的絶對の差は、單に外部的技術に存するにあらずして、人間內部の精神如何に存するからである、と言つて居る。

既に述べたる如く、女史は伊太利最近の教育學的傾向が、人類學的並に心理學的實驗を偏重するを慨し、眞誠の教師たるものは、實驗の末枝に巧なるを以てのみ能事終れるにあらずとし、大に精神の修養を重んじ、殆んど又他の極端に馳せたるかの感を免れない。吾人は須く其の中道を進むべきものであると思ふ。

然らば教師は如何なる精神を修養すべきであるかといへば、女史は科學的精神を養へと言つて居る。科學的精神とは何ぞやといへば、之を現はすに種々なる詞を弄し、色々の實例や形容詞を添加して居るが、要するに教師たる者は科學的眞理を渴仰して、之が捕捉を熱望し、之が爲に一身を犧牲に供するの意氣込を指して居る樣である。以下原著者の詞を其の儘引用して見よう。

『吾等は科學的實驗法を創作して之を授けたからといつて、之を以て新

教師を養成し得たとは言はれない。何となれば、畢竟吾等は之に依りて、教師をして眞に實驗科學の門外に佇立せしむるに過ぎないからである。吾等は教師を導きて、實驗的研究の最貴最奥の堂に上らしめないからである。此の堂に上つてこそ、始めて眞の科學者である。

然らば科學者とは果して何ぞや？

眞の科學者とは、物理實驗室に於て諸機械の使用法を了解せる者の謂でなく、或は化學實驗室に於て巧に、精密に、種々なる反應を取扱ひ得る人の謂でもなく、又生物學に於て容易に顯微鏡の標本を作る事の出來る人の謂でもない。

（註）科學的精神とは眞の科學者の精神の意なり然らば則ち眞の科學者とは何ぞや？

實驗は助手の方が巧なり

實に實驗の巧なるは、學者先生其の人よりも助手の方が、遙かに巧妙である事は珍らしくない。吾等の科學者といふ尊號を上るに足るべき程の人は、實驗は單に生命の最深眞理を發見するの手段に過ぎない、と考ふる底の人を謂ふのである。其の人を魅する秘密の幕を揭げ、其の研究に際しては、自然界の秘密に對する愛慕の情内に燃ゆるを感ずるの人であつて、其の熱心の極遂に我が身をも忘るるの人を指すのである。

科學者は自然界の崇拜者なり眞理の爲に自己を犧牲に供する人なり

科學者は巧なる機械の使用者ではなくて、自然界の崇拜者である。而して彼等は、信者が宗教的命令に對して、其の信奉の赤心を外部に表示するが如く、其の自然界に對する愛情の外部的表號を保つて居る。眞正科學者の部類に屬するの人は、中世紀の Trappist（トラピスト） の如く世間の何事をも打忘れて、唯實驗室の中に生活し、自己を忘れるの極衣食にさへ無頓着の人、或は永年倦まず顯微鏡を使用したる爲失明したる人、科學的熱情の餘り結核性の黴菌を自己に接種するの人、或は虎刺列病媒介者の何者たるかを知らんが爲に、當該患者の糞便を分析する人、若くは又化學的準備が爆發するの恐ある事を知りながら、其の學說を證明せんが爲に生命を賭して實驗を試みるの人等である。而してこれこそ眞に科學者の精神にして、自然界は自由に其の秘密を漏洩し、發見 (discavery) といふ月桂冠を以て其の頭に戴かしむべきである。

されば眞の科學者と稱せられんが爲には、「科學者の精神」がなければな

らぬ。此の精神たるや、單なる機械的熟練よりは遙かに尊いものである。而して此の精神の技術の上に卓出する時に、始めて科學者は眞の成功の頂點に達したのである。科學者にして一旦此の點に達したならば、科學は彼に依りて自然界の新天啓を得るのみならず、純粹思索を旨とせる哲學的總合に至るまで、其の思澤に浴するのである。

吾等が教師をして養はしめんとする所は、科學の機械的熟練よりは寧ろ其の根本たる精神である。故に教師の科學的修養と實驗的技術とは極めて重要なりとするも、猶吾等は小學教師を完全なる人類學者、熟練なる實驗心理學者、若くは兒童衞生學者たらしめようとはしない。唯吾等は、教師を實驗的科學の分野に導き入れて、相當なる熟練を以て種々なる機械を操縱するの能力を得しむれば足るのである。要するに吾等は教師を指導して、教師特殊の活舞臺たる學校と科學的精神とを融合し、覺醒せしめんとするのである。然る時は一層廣き舞臺と一層大なる可能性とは、其の門戸を教師の前に開くであらう。換言すれば、私は教育者の心情に自然現象に對する一大興味を吹き込み、好みて實驗し、其の結果に對する熱望を有する底の人を養はんとするのである(「教育的人類學」中「實驗的科學に用ひらるゝ方法」參照)』と。

技術は字母の如く精神は意味

尙女史は、更に實驗的技術よりも根本精神の重んずべき事を悉知せしめんが爲、適切なる比喩を掲げて曰く、實驗機械は、A、B、C等のアルファベット文字即ち字母の如きものにして、自然界の眞理は是等の文字によりて啓示せられたる著者の思想に該當するものである。故に機械は單に自然界の眞理を探究するの手段、方便物に過ぎない。教師の獲得せんとする所は手段方便物たる機械にあらずして、眞理其の物である。此の眞理を捕捉するにあらざれば、精神を得たるものでない、と。

茲に一小兒があつて、學校にて字母(日本の假名に相當す)を習ひ、其の字母の集まつて成れる詞の讀方を學び、それ等詞の集まりて成れる文章を、只機械的に讀み得るに至り、此の兒は大に得意となりて、何んな本でも讀めるといふ意氣込にて、最早學校へ行く必要もないと、速斷し、學校を退い

て毎日圖書館に通ひ、手當り次第に本を讀む。勿論印刷さへ鮮明にあるならば、如何なる本をも讀み得るには違ひない。然れどもそは單に機械的讀方にして、著者の大思想の解る筈はない。ダンテやセキスピアの脚本を見る、成る程讀めはするものゝ、陳分漢で其の意義は少しも分らぬ、茲に於てか再び學校へ歸らねばならぬ。

斯くの如く單に實驗を爲す事のみを敎へられた敎師は、綴字書に於て詞の音のみを讀み得る子供と、何等選ぶ所はない。然れども敎師をして眞理を捕捉せしめんとせば、其の養成は中々容易でない。從つて敎員養成論は自ら特別の大研究を要するものであるから、此所に之を詳論するの餘地なし、として其の詳細には論究して居らぬ。只女史は斯くの如き困難を排して新敎師を養成し得たりとして、扨其の後尙新敎師に要する他の資格を種々述べて居る。

『吾等先づ永き辛棒强き課程を經て、自然の觀察の出來る樣な新敎師を養成し得て、科學者の眞似がソックリ出來る樣になつたと考へよう。其の科學者とは、眞夜中に起きて森や野に出かけ、豫ねて興味を有する昆蟲類を訪問して、其の目醒むる狀態や、早朝の活動を觀察せんとする人である。固より彼は眠くあらうし、前日の跋涉に依りて疲れても居ようけれども、觀察の熱心は毫も衰れない。彼は泥濘を恐れず、雲霧に身を濕し赫日の背を燒くも顧みず、唯自ら觀察せんとする昆蟲類に人の近づけるを知らじめずして、刻一刻いと平和に、其(昆蟲)の自然的職能を營める實狀を觀察せんとするのである。

再び眞乎科學者の實例

學校敎師にして既に此の境にまで達したならば、彼は眞に科學者の列に入る事が出來たのである。眞に科學者の例を示せば、半ば盲いて猶顯微鏡に親しみつつ、特殊なる水中に小動物の自發運動の研究を繼續する。此の研究者の目には、是等小動物の常に動物相互に相忌避するが如く、若くは食物を搜索するが如く、絕えず蠢動して居るのであるが、是等の小動物は、漠然ながら意識を有して居る樣に見える。其の後彼は此の鈍き生物に電氣をかけ、一群は陽極に、他群は陰極に集まるか否かを見る、而して

次に光の刺戟を與へて或者は明に集まり、他の者は却つて之を避くるか否かを見る。

彼は斯くの如き數多の場合を觀測する際、常に次の如き疑問を心に描いてゐる。

『刺戟に向ひ、或は之を避くるは、同じ小動物が相互に忌避し、或は食物を選ぶ運動と全く同一性質であるが、詳言すれば斯くの如き相違は、選擇の結果漠然ながら意識を有する爲にして、磁石のそれに於けるが如く單なる物理的牽引力、若くは反撥力ではない』

と、先生が(科學者)此の實驗を終つたのが午後四時、未だ弊當を食はないと假定する。されど幸にしてそれが實驗室にて爲されて居たので、此の成功を彼は中心喜ぶであらう。何となれば、若し彼が自宅に於て實驗して居たならば、食事の爲に數時間前家族の爲妨碍せられたであらう、と思ふからである。今教師が此の科學者と同じ興味、同じ態度を以て自然現象の觀察が出來るまでに達した、と想像せば如何?。

如何にも結構。然れどもそれのみにては未だ不十分である。實は教師は其の特別なる使命として、昆蟲やバクテリヤを觀察するにあらずして、人間を對象としなくてはならぬ。人間の研究は昆蟲族のそれに於けるが如く、早朝より追つかけ廻はして毎日物質的習慣の表示をさへ究むれば、モウそれで良いといふのではない。教師は人間の知識的生活の覺醒狀態を研究するのである』と。

是に由つて之れを觀れば、教師の任務たる人間の研究は、動植物のそれより遙かに困難である、況んや教師の養成は人類に對する興味を主とするのであるから、觀察者と被觀察者との間に、親密なる關係あるを特色とする、此の關係は植物學者動物學者の、其の研究の對象に對する關係とは異つて居るのであるから、尙更困難である。

然れども人間は自己の一部分を犧牲に供せずては、其の研究する所の昆蟲若くは化學的反應を愛する事は出來ない。此の自己犧牲は只現世の立場より物を見る人にとりては、眞に人としての生活の放棄、殆んど殉

職の如く見ゆるであらう。此の點より考ふれば、人間に對する方が大分容易である。殊に人が人を愛する事は更に容易にして、何も不思議はない程單純な事柄である、と述べて居る。

以上教師の修養には、技術の方面と精神の方面とある事を說き、其の中後者の更に重んずべきを力說して、此の方面を詳述したのであるが、精神方面に關して更に一項目を加へて居る。即ち教師たらんとする者は、子供の如き無邪氣なる心を有せよ、と下の如く言つて居る。

『教師修養の第二の形式即ち精神方面(第一形式は技術の方面)の觀念を明かにする爲に、耶蘇基督の最初の弟子、即ち使徒の心情(Mind and heart)に分け入つて見よう。即ち使徒等は主より、現世は如何に貴く思はれても、遙かに優越なる天國に就いて話されたる時の心持に就いて語らう。

彼等は無邪氣に問ふて曰く、

「主よ、誰が天國に於て一番偉くなるでせう?」

其の時耶蘇(イエス)は尊敬と驚きの眼を以て、主を睜めて居た小供の頭を撫で

(註)教師は無邪氣なるべし

眞乎教師の資格

ながら、次の如く答へた。

『此の子供の樣になる事の出來る者が、天國に於て一番偉い人になる』

と、之を要するに、教師は子供の如く無邪氣なれとの意味を述べたものであるが、單に無邪氣の一要件のみにては不充分であるから、之に科學者の精神即ち犧牲獻身の德とを併せ有すべきことを、次の如く面白く說明して居る。

『今是等諸弟子の間に、熱情あり敬虔なる一神靈が宿りて(多人數を共同の一神靈が支配する)、彼等諸弟子を此の神靈中に取り入れたと想像しよう。

此の偉大なる心靈を有する一偉人が、敬と愛と神聖なる好奇心と、此の精神的偉業を成遂せんとする希望とを打つて一丸とし、幼兒の凡ての表示を觀察するとせば如何。斯かる聖者を教室に送りて觀察せしむるとしても、それにても未だ吾等の養成せんとする新教育者ではない。要するに心靈に科學者の自己犧牲的精神と、使徒の高尙なる愛とを植付けた

ならば、茲に始めて教師の精神を養ふ事が出來る』と。

上來述べ來りたるが如く教師は科學的でなくてはならぬが、就中其の技術的方面よりも、其の精神的方面を重んじなければならぬ。而して所謂科學者の精神とは眞理を渴仰憧憬し、其の研究の爲には一身を犧牲にするの精神をいふ。而も教師の研究の對象とする所は個々の兒童である。然るに兒童研究は、從來の教育法の如く兒童を抑制拘束しては、其の眞相を發見する事が出來るものでない。之が爲に出來得るだけ兒童に自由を許して、其の天眞實相を赤裸々に發露せしめ、之が觀察を努めねばならぬ。此の必要より女史は自由主義を高潮し、巧に之を例解して居る。今之を述べんに、先づ博物學者はピン付にした蝶の標本に依りては、昆蟲生活狀態等を研究すること能はざるが如く、机腰掛に拘束して置き常に不動の狀態にあらしめては、兒童研究は出來ないといふ事を述べて居る。

『先づ茲に觀察と實驗との兩方面より研究する動物學者、又は植物學者があるとせよ、彼は一種の菌類を研究せんが爲に、其の住する近邊を徘徊

兒童研究と自由主義

ピン付の標本は昆虫の研究には不可能なるが如く束縛せらるる兒童を以てしては以て兒童の深相を赤裸々に研究すること能はず

する。

此の科學者は、宏漠たる田舍に於て觀察を逐げ、而して後顯微鏡其の他實驗室の裝置を利用し、出來得るだけ精密に其の研究事業を成し遂げた。彼は實に自然界を研究することの果して如何なる事を意味するかを熟知し、又其の道の研究に關して、近時の實驗的科學が提供する凡ての手段をも知悉せる學者である。

而して又此の學者は、自らなしたる創作的探究により、攫んでられて大學教授の椅子を占め、今度は更に膜翅類に關して、前よりも一層進みたる創作的穿鑿を爲すべき任務を帶びたりとせよ。彼は其の任に就き、硝子箱の中に針にて止められた蝶の標本箱を示されたりとせよ。先生は先づ言ふであらう。是れは子供の玩具であつて、科學的研究の材料ではない。是等の標本は子供が捕蟲網を以て蝶を追ひつ捕へつして遊んだ遊戯の名殘であると。蓋し斯かる材料を以てしては、實驗的科學者は何事をもなす事はできない。

今若し我等の言ふ意味の新教師、即ち科學的に養成せられたる教師が小學校に傭聘せられたならば、事情は全く前の科學者と同樣である。兒童は自己人格の自發的表示を抑壓せられて、全然死人の樣である。是等學校の兒童はピン付の蝶の如く、學校にて得たる無意義にして且無益なる知識の翼を擴げながら、各自一定の場所即ち其の机に縛りつけられて居る。斯かる境遇に於ては、我等のいふ新教師に、科學的精神を養ふことは出來ない。蓋し科學的教育學の產聲を學校に於て擧げしめんとせば、兒童に自由なる自然的發表を許さねばならぬ。是れ最大最重の改革である。然るに現今斯かる自由の原理が學校内にも、將た教育學にも存せりとは、何人も肯定する事は出來ない。勿論少數の教育學者は、ルソーに導かれて兒童の自由に關して說きたる者もないではないが、そは到底實行すべからざる原理と、漠然たる感興とを洩したのみであつて、自由の眞意義は實際學者間に知られて居なかつた』と。

改治上の自由と教育上の自由

斯くて舊教育學に於ても、多少自由の概念に論及した者もなきにあらざれど、現今教育學に於て主張する所とは大に逕庭あり、との旨を次の如く論じて居る。

『ルソー一派の學者輩は、教育上に所謂自由を以て社會的自由と混同した。即ち奴隷狀態より免れんとする叛亂の際に、人民を鼓舞する自由と全然同義の概念、換言すれば社會的自由と解して居た。こは勿論高尙なる概念であるが、尙著しく限定せられたものである。社會的自由は常に部分的自由にして、國家の自由階級、自由思想の自由等を示すに過ぎない。

然るに教育學を感興せしむべき自由の概念は、一般的である。第十九世紀に於ける生物學的諸科學は、生命の研究に對する方法を吾人に提供せる際に、自由の意義を示した。

斯くて舊教育學に於ても亦、兒童を教育する前に先づ被教育者を研究し、以て自由に其の自發的表示に一任すべきことを、漠然言明してゐる樣であるが、是等の直覺は粗笨不確實に發表されたるに過ぎずして、然かも唯前世紀間に於ける實際的科學の貢献を俟ちて後、始めて實用に供せら

教育上束縛の一例としての机腰掛

れるのである。併し今はそれを論ずるの要は無い、唯吾等の立場より、自由の何たるかといふ事を說明すれば足りるのである。兎に角今日の教育學が自由を語るといふものあらば、蝶の標本箱の前に立ちて、是等の蝶は生きてゐる、といふ兒童の笑ふべきと同じである。

奴隸の原理は今も教育學に逼滿し、學校にも逼滿して居る。私は唯其の一例として、固定的机腰掛を擧げよう。古き物質科學的教育學の模範的誤謬は、實に是机・腰掛)に存する。蓋し古風の教育は、學校の破壁を修繕する爲に、科學といふ角い石を運んだのである。學校には最初長い狹いベンチを備へて、多數兒を菌集着坐せしめ、其の後科學が來りてベンチを完成した。之が爲に近世の人類學に多大の注意が拂はれるに至つた。兒童の年齡や四肢の長さは、正當の高さに座を設けんが爲に考察せられた。机腰掛の距離は無限の注意を以て算定せられ、畸形の豫防に努め、遂に座は一人用なりとて、其の長廣を適當にした。故に兒童はキチンと座につき、伸びたり屈んだり、側面運動などをする事が出來なくなつた。是等は一兒を嚴に隣兒より分離せしめんが爲に、計劃されたのである。是等の机は、兒童が全然動作することなくして、猶四方を見る事の出來る樣にしてある。

斯くすることの目的の一は、此の離隔によりて兒童の教室に於ける、不德(男女關係上の)の行爲を防遏せんが爲である。一體社會に於ては、教育上男女兩性の區別を口にするを耻づべき事として居る。今社會上に於て、斯く嚴に分離するの法を採つたならば、人は果して何と言ふであらうか。蓋し之を口にする事が、却つて其の潔白清淨を害する恐が存するからである。然るに我が教育界にては、學校を僞善家製造機械たらしめんとする科學を有してゐる。然かのみならず、此の有り難き科學は竿頭更に一歩を進めて、腰掛を完成し、可能的兒童を動かざらしめ、換言すれば之を抑壓せんとして居る。

机腰掛は又兒童が良き位置を取るならば、衞生的に最も安樂なりと考ふるが如く排列されてある。腰掛も足掛も机も共に、兒童が立ちて其の

業を取る事の出來ない樣に構造されて居る。實に兒童は、正しき姿勢を以て座する丈の餘裕が與へられたるに過ぎない。教室用の机腰掛が完全になつたといふのは、先づ斯くの如き狀態を指すのである。所謂科學的教育學の信者は、何人も科學的机の模型を設計し、多數國民は其の「國民的机」について誇つて居る。競爭の結果、是等種々なる機械は專賣權を得た。

勿論是等机腰掛の構造の奥には、幾多科學的原理が含まれて居るには相違ない。人類學は身體の測量と年齡の關係を調ぶる上に注意され、筋肉運動の爲には生理學、本能破壞の爲には心理學、殊に脊椎彎曲の保護の爲には衞生學が參考されて居る。

實に是等の机は、其の構造に於て兒童の人類學研究の結果に追隨して居るから、之を科學的なりといふことが出來る。是に於てか余は、學校に於て科學が文字通りに應用されたる實例に遭遇するのである。

抑〻近時兒童衞生學・人類學・社會學等に對しては多大の注意が拂はれ、一般思想は斯く迄進んでゐる世の中に、上述の如き机の根本的誤謬が今まで摘發されずに居たといふ事は、頗る不思議な現象と言はねばならぬ。況んや過去數年間は、各國共に殆んど兒童保護に對する運動が八ヶましかつた事を思へば、今更に不思議の感に堪へぬのである。

併し私は思ふに、將來幾くならずして、世人は是等科學的机腰掛を信せずして、此の所謂脊椎彎曲豫防的に構成されたる、驚くべき腰掛に驚愕の手を以て觸るゝに至るであらう。と

科學的腰掛の發達は、本來健全にして姿勢正しく生れた兒童を驅りて、駝背（ヒムン）たらしめんとするものである。元來脊椎骨は、生物學的には最も原始的根本的にして、骨格中最初に出來た（胎內に於て椎骨が最初に出來る）もので、人體中最も固定的のものである。蓋し骨骼は有機體の最も堅固なる部分であることを思へば、思ひ半ばに過ぐるであらう。――脊椎骨は原人が獅虎と爭ひし時、彼が巨象に打ち勝ちし時、彼が盤石を掘りて鐵を使用したる時には强固無比なりしものも、今

や學校の桎梏の下には些の抵抗力なくして、容易に彎曲するものである」と。

更に女史は現今社會上に於ては、自由の範圍が益擴張せられんとする時代なるに、學校が机腰掛を以て兒童を拘束せんとするのは、文化の趨勢に逆行するものなりと極論して、次の如く云つてゐる。『熟〻惟ふに、所謂科學が學校に於ける奴隷的機械(人を奴隷にする機械)の完成に貢献し、全世界に發達瀰漫せる社會的自由の運動に逆行せるが如きは、誠に不可思議の極と言はねばならぬ。何となれば、科學的腰掛の出來た今の時代は、不正なる勞働の桎梏より、勞働者を解放せんとするの時代であるからである。

（註）机腰掛を以て兒童を束縛するは文明の趨勢に逆行す

（註）社會の狀態は益自由に向はんとす

蓋し現今社會的自由に對する傾向は最も分明であつて、各方面に於て其の現象が顯著である。社會の先覺者は自由を叫び、勞働者亦反覆天下に呼號し、科學的社會的集團は同一の運動を絶叫し、我等の雜誌も此の聲に充ちて居る。營養不良の勞働者は强壯劑を望まずして、廉食を防止すべき經濟狀態を渴望する。身を屈めて多くの時間を辛棒する鑛夫は、鼠蹊部(そけい)の破裂に犯され易い。併し鑛夫は之が爲に胴皮(アブドミナル・サポート)を要求せずして、短かき勞働時間と、より良き職業とを要求し、以て一般普通民と同樣に健全なる生活を送らうとする。一般社會は既に斯うであるのに、學校兒童は最も不衛生なる狀態の下に作業し、普通の發育は望む可からずして脊柱さへ彎曲せんとする際に、教育者の之に對する救濟策は、畸兒治療的腰掛であつて、宛ら鑛夫に胴革を、營養不良の勞働者に藥を提供すると同樣である。

嘗て一婦人は、私を學校に關する凡ての科學的改革に同情あるものと誤解したと見え、さも滿足氣に私に、兒童用の胸衣腹衣(Corset and brace)を示した。婦人は自ら是等の機械を發明して、腰掛の用を完成すると考へて居たらしい。

一醫師は脊髓彎曲救濟上更に一方法を案出した。私は腹當といふ此の畸形兒療治用機械と、時々は頭又は肩を支へて兒童を懸垂せしむる方

法とを說いて見よう。之に依りて身體は伸び、以て椎骨を眞直する事が出來るといふのである。學校に於ける机腰掛の如き畸兒療法的機械は、既に誠に結構であるが上に、今日或人は腹當を提供する、更に一歩進んだならば、我等は生徒を宙に吊して、系統的療法を與ふべしとの議を提出さるゝかも知れない。

凡て斯くの如きは、科學的方法を、(頽廢せる學校に對して、)物質的に適用せんとする必然の結果である。

併し兒童に於ける脊髓彎曲防止の合理的方法は、兒童の學校課業を一變せしむる事である――一日中長時間有害なる位置の下に掩留せしめぬことである。斯くてこそ學校が要求する自由の勝利であつて、机の機械的構造の如きは殆んど問題とならないと思ふ。

縱令固定的机が兒童の身體に有利なりとしても、机を動かす事が出來ない爲に完全に掃除を爲す事も出來ないで、不潔な境遇を與ふる事になるに違ひない、これ甚だ危險にして又不衞生的である。足掛も亦取外し

（註）兒童の脊髓彎曲症防止せんが爲に机腰掛等を案出せんよりは兒童を長く教室に留めぬ方が得策なり

が出來ない爲に、兒童が街道から運んで來た塵埃は、其の上に推積するに至るであらう。現今家庭用家具調度は著しく改良され、是等のものは努めて輕く、且單純にして運搬掃除等、凡て輕便になし得らるる樣になつた。然るに學校は是等社會的改良に對して、一隻眼をだに有せぬものゝ樣である。今や兒童は、其の骨が畸形にさるゝが如き、人爲的境遇の下に人となるべく宣言されて居るが、斯くては其の精神上に如何なる害を及ぼすべきかを問ひたい。

我等が勞働者救濟に就いて語る時に、貧血症、壞裂病等の如き疾病の下に呻吟する時は、之と同時に他の創痍即ち精神的の瘡痍が共發し、此の瘡痍たるや奴隷的境遇の下に在るものゝ、何人も免る能はざる症狀である。

されば我等が『勞働者は自由の原理に據つて解放されざる可からず』と稱ふる所以は、我等の勞働者は、之によりて精神を害せんとする恐があるからである。

人間の血が枯渴し、或は其の內臟が仕事を爲すために弱めらるゝ時に

身體を拘束する時は其の精神を萎靡せしむ

は、彼の精神は暗黑にされ、無感覺ならしむるに相違ない。甚だしきは、精神は身體內に殺戮され終るかも知れない。奴隷をして道德的墮落に終らしむる諸因中、特に大なるものは人道的進歩を抑壓する所の高壓である。人類は、扛起せんと煩悶すれども、其の重荷の爲に倒さるゝのである。されば奴隷解放に對する我等の絕叫は、其の身體的方面に關するものよりも、寧ろ其の精神方面に關して述ぶる者であることは明かである。

今若し我等の前に提出せられたる問題が、兒童教育に關するものなる時は、我等は如何に論ずべきであらうか。

我等は、教師の仕事が甚だ悲しむべき狀態に在るを熟知して居る。一般の學校に於ては、或乾燥したる事實を學生の腦裡に注入せねばならぬ。此の荒凉たる仕事に成効せんが爲に、教師は生徒を訓練して靜肅不動ならしめ、以て其の注意を强制する必要を感ずるより、賞と罰とは生徒をして一定の身體の狀態を維持して、教師に謹聽せしむるが爲に、最も容易にして且有効なる手段である。

（註）机腰掛が身體的自由を束縛するが如く賞罰は精神の自由を束縛す

（註）罰が心の自由を束縛するは明なれども賞が何故に之を拘束するかといふに心には「いや」と思ふ事にても賞を得んが爲に心にもなき事をも止むを得ず爲さゞるを得ざる場合あるが爲に內心の自由を害せらるゝが故なり

現時社會に於ては、苦杖體刑の如きは之を除去するを便利とし、從つて授賞式も昔日の如く嚴しくはなくなつた。是等部分的の改革は科學に依りて是認せられたる支柱であつて、又近時頽廢せんとする學校の支柱たらんとして居る。蓋し是等賞罰は、譬喩的に言へば心靈の机腰掛であつて、精神を奴隷とする裝置である。

實に賞罰といふ心靈に對する机腰掛は、心の醜陋を減ずる事なく、却つて之を挑發（プロヴォーク）するものである。賞罰は人を刺衝して不自然若くは强迫的努力に陷らしむるものなれば、我等は確かに賞罰と相聯關して、兒童に其の自然的發達を遂げしむることが出來ない。競馬師は其の鞍に跨る前に、馬に一塊の砂糖を食はしめ、御者は尻を打ちて馬をして手綱に依りて、與へられたる相圖は對應せしめんとする、然かも是等兩者の場合に於ては、何れも平原に住める自由なる野馬の速かなるには及ばない。

然るに教育の場合に於ては、人は人に對して桎梏を嵌めねばならないのであらうか。

（註）人が社會的生活を營む以上は多少社會の拘束を免れずとは雖も是等の束縛は文化の進むにつて減ずる傾向あり

勿論社會的に、人は社會といふ桎梏に繫がれたる自然人である。然れども一瞥を社會の道德的進歩に與ふるならば、我等は此の首木（桎梏）は、次第々々に緩められつつあるを見る。換言すれば人類の中に『自然』若くは生命が、次第に勝利を占めんとして居る。（首木を嵌むるは不自然にして且人に生命即ち活力なからしむ）奴隷（アレイヴ）といふ首木は僕婢（サーバント）のそれに和らげられ、僕婢は次第に勞働者（ワーク）とまで緩和されて居る。

奴隷の凡ての形式は漸次薄弱に且消滅せんとする傾向を有し、婦人の奴隷的地位も高められんとして居る。實に文明史は征服と自由との歴史である。我等は現に如何なる文明の下に住するかを反省し、賞罰の効果は我等の進歩に必要なりや否やを問はねばならぬ。若しも我等は既に此の點を通り越して居るにも拘はらず、猶斯かる形式の教育を適用しなければならぬとすれば、新時代を低き水平線上に引き戻さんとするものにして、兒童をして文明の遺産を繼承せしむる所以ではない。

學校の賞罰制度と相類するものが社會に一つ存する。それは政府對官吏間である。政府は毎日國民公共の善の爲に働いて居る。併し官吏自らは直接國利民福を目的ともせず、又之を感じもせぬ。換言すれば是等官吏は、國家は彼等の働きによりて國家自身の職責を成遂し、凡ての國民は、是等官吏の仕事によりて其の恵に浴するものである、といふ事を思はない。（國利民福は其の問ふ所でない）

官吏にとりては、其の働の直接善は其の昇進にあること、猶兒童が進級を目的とするが如きものである。蓋し人にして其の働の大なる目的を忘るる時は、恰も學校兒童が其の實力以下の學級に編入されたと同樣である。彼は奴隷の如く、眞に自己の權利を奪ひ去られたのである。抑〻機械は、人間としての威嚴は、恰も機械の如くに貶せられたのである。彼の機械自身の内部に生命の衝動力を有せざるが故に、其の運動を繼續せしめやうとするには、時々油を注がねばならない。元來勳章や賞牌の如き微物は人爲の刺戟にして、夜行の際一時闇き淋しき道を照す燈火に過ぎない。之と同じ論法によりて學校は兒童に賞を與へる、官吏は賞を得ざ

らんことを恐れて逃亡を見合せ、以て其の無趣味なる職業を遂行することと、猶生徒が進級せざらんことを恐れて書籍に親しむと同樣である。

上官の非難は全然教師の叱責と異らぬ。事務の誤謬を訂正せらるるのは、拙き文に下されたる評點と同一であつて、兩者の併行は殆んど完全に行はれて居る。

併しながら若しも行政官省の政事が、國民の偉大を發揮するが如き方法にて行はれなかつたならば、換言すれば若しも腐敗が容易に演ぜらるるならば、そは官吏の精神中より人間的威嚴を消滅せしめて、賞罰といふが如き些細にして且直接なる事實にまで、官吏の眼界を限定したからである。國家の繁榮する所以は、官吏の大多數は公正にして、賞罰の如く心を腐敗せしむるものに抵抗し、以て正義公道といふ抵抗すべからざる强き潮流に從ふからである。蓋し社會に於ては、生命が貧死といふが如き種々なる事情に打勝ちて新らしき勝利に向ふが如く、自由の本能は在らゆる障碍を征服して、勝利より勝利に進むものである。

此の自由たるや生命の人格的、然かも一般的勢力である。此の勢力は屢〻心靈(ソール)の奥に潛み、發して以て世界を前進せしむるものである。併し眞に人間的事業を爲し、眞に偉大にして卓越なる或事を成遂するの人は、賞と名つけらるるが如き些細なる牽引力によりて刺戟さるることなく、又罰と呼ばるる小惡果を恐るることによりて萎縮するものでもない。戰場に於て巨人の大軍が昇進、肩章、勳章以外に興味を有することなく、或は銃殺の處刑をのみ恐るるとしたならば、或は又是等の大軍が愛國心の燃ゆるが如き一掬の倭人と對抗するとしたならば、勝利は恐らく後者に歸するであらう。眞に英雄が陣中に討死する時、若し單に賞罰を念としたならば、彼の英雄は却つて墮落に終り、腐敗と臆病は其の胸臆を去らないであらう。

凡ての人間的勝利、凡ての人間的進歩は、內部勢力の上に立脚する(賞罰の如き外部的勢力によらず)。

されば若き學生が、醫を自己の天職と見て深き興味を以て學業を修む

るならば、後日必ず國手となる事が出來るであらう。

然るに遺產を目的とし、名醫の肩書を以て良緣を結ぶ手段とし、若くは其の他物質的便益の爲に刺戟さるるならば、決して大醫國手となる事は出來ない。又斯かる似而非醫者の働によりては、社會の文化は一歩たりとも進めらるるものではない。若し斯かる外的刺戟が必要であるとしたならば、醫者たらんと志さぬが遙かに增しである。各人は各別の傾向、特殊の天職を有して居る中には卑しき職業に堪能なるものもあらうが、それも矢張り社會には必要である。尤も賞罰の制度は個人を其の天職より轉向せしめ、誤れる、而して本人に取りては無益なる事業を選定して、之に從事せしむる事は出來る。唯恨むらくは人的活動は曲げられ、滅ぜられ、甚だしきは皆無にされる事もあるといふ一事である。

我等は常に世界の進歩に注意し、各人を其の進歩に伴隨せしむる樣鞭韃せねばならぬ、と反覆絶叫する者である。併し進歩とは新に生れたる新事實より來る者であつて、世人は未だ其の効果を豫知し得ぬ爲、進歩に

（註）人各能不然あり能動的刺戟にあるに官位爵位外の所にが反して其長の職を選ぶもの終に其の至るに身を誤るべし

（註）善を行ふものの必ずしも賞せられず却つて嚴罰に問はるゝことあり社會改革者の如きもの是なり

貢獻せるもの必ずしも賞を以て報いられず、世人は却つて其の首唱者を節に死せしむる事がある。神は神殿（ジュピター）に於て、月桂冠を戴かんとの望を以て作詩する事を禁ずる。斯かる幻影が詩人の心に宿るならば、ミューズ（文學美術の神）は直ちに消失するであらう。

蓋し詩は、詩人が自身を忘れ、賞を忘れたる時にのみ其の心靈より湧くものである。而して若し桂冠を得るが如き事あらば、斯かる賞を單に虛榮に過ぎざるものと感ずるであらう。眞の報償は、作詩によりて詩人自らの內部勢力を啓示し得た點に存する。

されど人には、外部的賞の絶對に存せぬでもない。例へば演說家は、聽衆が辨士自身の啓發したる感情に動かされて、其の變つた顏色を見るならば辨士は非常なる滿足を感じ、斯かる悅喜は自分が聽衆に愛せられたるを自覺せる人にのみ感知せらるるのである。我等の心靈は此に勝利を得た。これぞ我等に眞の報償を與ふる唯一の賞である。

時に又我等は、一時自身を世界の大人物なりと想像する事もある。斯

（註）然るに人若し賞のみを目的とせば社會改良の如き善事に志すものなきに至ちん

かる際には實に幸福なる瞬間であつて、人が平和に其の存在を繼續し得るのは之が爲である。例へば戀の成就した時、又は始めて男兒を擧げた時、或は一大發見をなし、若くは新著を出した時がそれで、斯かる際には眞に我以上の大人物なしと感ずる者である。

斯かる瞬間に或一人が權威を笠に進み來り、我に賞品若くは勳章を與へんとするものあらば、それこそ我等の眞報償を破壞するものである。

――『お手前は誰ですか』、我等は我等の幻影の失はるるまで斯く叫ぶであらう。我は『人類の第一優者なりといふ我が美しき夢想を破れる汝はそも何人であるか』、『我を眼下に見て賞品を贈らんとする汝は誰であるか』と。實に斯かる瞬間に於て、斯かる人物に賞を贈り得るは、神を措いては外にないのである。

罰に關しては、一般普通の心靈は擴大によりて完成さるるものであるのに、罰は普通の意義に從へば抑壓の形式である。されば罰は惡事の中に人となりし劣等人物に對しては効果あるべきも、斯かる者は數に於て甚だ少く、社會の進歩は是等の惡人に依りて影響はされない。刑法は若しも人が法によりて示されたる範圍内に於て不正直ならば、罰を以て之を威嚇するのである。併し我等は法を怖るるが爲に正直の德を守るのではない。我等が偸盜殺人を敢てせぬのは平和を愛するからである。我等生命の自然的傾向は、我等を向上せしめ、我等を導きて醜劣邪惡の行爲より遠ざからしめんとするからである。

今や我等は問題の倫理的或は形而上的方面を穿鑿せずとも、以下の事實は確實である。即ち犯罪者は法を犯す前に、犯則に罰刑の伴ふことを認知するならば、刑法は彼に對して恐ろしき重荷であることを感ずるに相違ない。然るに敢て法を破る所以は、犯則しても猶刑罰を免れ得ざるにあらずと自ら欺くからである。併し其心中には犯則と刑罰との競爭が起る。されば法は犯罪を豫防する上に効ありや否やと言はば、刑法は確かに或限られたる個人即ち犯罪者の爲に編成されたものである。一般市民は此の法の存在するとせざるとに拘はらず正直である。普通人

に對する眞の罰は個人的勢力と其の偉大の喪失其のものであつて、兩者は實に人間內部生活（インナーライフ）の根原である。斯かる刑罰は十二分の効力を以て人を制裁する。されば我等の一見富と幸福とを享樂しつゝありと考へられる程の人にして、猶上の如き形式の所罰に苦しめらるゝものがあるかも知れない。實に人は眞に己を威嚇するに足る責罰あるを知らない者の多いのは歎息の至りである。

而して教育の効果あるは正に斯から場合である。然るに現今我等は兒童を學校に抑留して、机其の他物質的賞罰といふが如き器械を以て其の心身を頽廢せしめんとして居る。我等は兒童を不動的に靜寂的に訓練せんとして居るが、そも彼を何處に導かんとするか、殆んど一定の目的はないのである。

兒童の教育は、其の知性の中に學校教科の內容を注入するを本旨とすることが珍しくない。是等諸教科は又文部省に於て編纂せらるる事も屢〻あつて、其の使用は法律によりて教師並に兒童の上に强ひられて居る。

噫〻斯くも激烈に、又勝手氣儘に、幼兒の內部に發生しつつある生命を抑壓することを思へば、我等は恥ぢて頭を隱し、我等の双手を以て其の罪深き顏を掩はねばならぬ。

セルギーは實に下の如く言つた。

『現今社會上に於て焦眉の急に迫れる者がある。教育教授の改造がそれであつて、此の事件の爲に戰ふものは人類再生の爲に戰ふものである』と。

第二講　教育法の沿革

本講の要旨

一、緒論
二、異常兒教育時代

本講はモンテッソリー教育法の第二章を講述するのであつて、大體三部に分つのが便利だと思ふ。

第一緒論。此の部分には主として實驗諸科學の研究法を述べてある。

第二異常兒教育時代。此處には異常兒に興味を有するに至りし次第、

理論的には佛國改革時代の大醫にして、異常兒教育に盡瘁したるイタール、セガンを研究し、實際的には歐洲諸國の異常兒教育の實況を視察すること、及び女史自身の經驗を述べ、併せて此の異常兒教育時代に於て、既に普通兒教育に盡力せんとするの志を抱くに至りし經過を論述して居る。此の最後の點は、最も注意精確を要する所である。

三、普通兒教育時代

第三普通兒教育時代。異常兒教育を斷念して普通兒教育に從事するに至りし機會を述べ、「兒童の家」建設の由來を詳述して居る。而して本書に講述する所は此の時代の經驗を述べたものであるから、後の講述と大關係のある部分である。

要するに本講は、モンテッソリー教育法の由來を尋ぬるに必要なる章であるから、門氏を深く研究せんとするものゝ爲には甚だ大切なる部分である。

第一　緒論

實驗的科學の

實驗心理學・實驗教育學等を科學たらしめんとせば、舊來の教育法を一變し、學校を改造して完全に兒童研究の出來る場所とし、同時に教員を養成せねばならぬ。即ち兒童に自由を與へて自發的に又赤裸々に其の眞相を表出せしめて、教師の觀察に便なるが如くし、同時に教師を養成して觀察實驗に堪能なるものとせねばならぬ。

研究法其一：自由の子供を研究せよ

然るに從來行はれて居る實驗心理學及び人類學に於ては、兒童を研究する際に、故意に兒童をして被實驗的態度を取らしめ、不自然なる狀態拘束されたる境遇の下に置きて研究するを常として居たれば、兒童は其の赤裸々の眞相を示さない。斯かる方法に於て進まば、教育の改良は到底望む事が出來ないのである。要するに兒童に關する實驗的研究を爲すには、自由なる子供を其の材料にせよといふのである。

併しながら女史は、實驗といふ語と觀察といふ語とを混同する傾がある。上述の方法に依らば觀察は出來るけれども、嚴密なる意義に於ける實驗は出來ないと思ふ。尙後章實驗といふ語が屢々現出して居るが、如何なる意味に使用して居るかを注意すべきである。

豫期の心を去り獨斷を避くべきこと

『一體實驗科學の特徴の一は、實驗の結局的結果に對して如何なる豫期心をも抱かずして、實驗を進行せしむる事である。例へば、吾等が頭の發達と知識の多少との關係を實驗的に研究せんと欲せば、各兒の頭を測る際に、何の兒が一番悧好で、何の兒は愚鈍であるといふが如き考を措いて、虚心平氣に測量せねばならぬ、若し最も悧好なるものは最も發達せる頭を有たなければならぬと豫想する時は、必然的に研究の結果に影響するからである。故に實驗者は、實驗の際は凡ての豫想を除去しなければならぬからして、心理の實驗を爲さんとする者は、先づ從來の信條を捨て、實驗的に眞理の研究を爲す事が必要である。例へば兒童心理學に於て、從來抱持して居た獨斷說に基いて實驗してはならない。之に反して兒童に自由を許す、といふ方法に依りて進まねばならぬ。兒童の自發的表示を觀察して、眞の科學的兒童心理學を建設するに足るべき結論を抽出せんとせば、兒童に十二分の自由を與へねばならぬ。斯くの如き方法に依らば、吾等は大なる驚きと、思ひがけなき成効とを收得する事が出來るのである。

教育學に特有なる研究法

兒童心理學と教育學とは、實驗を巧にして其の内容を充實せしめなければならぬ』

次には教育學に特有なる研究法如何と問ひ、之に答へて之には特別なる研究法がなくてはならぬと言つて居る。詳言すれば科學的教育學は衞生學・人類學・心理學を基礎とするものであるから、一部分は是等三者に特有なる研究法を用ひて、被教育者を個別的に研究する必行の存するものなれども、教育學の全體より看下せば、是等は第二次的のものであると述べて居る。此の點は從來教育學上にて矢釜しい問題であるが、女史は別にこれぞといふ研究法を詳述して居らぬ。併しながら女史をして言はしむれば、「モンテッソリー教育法」(Montessori Method にして余の講述せんとする書)に於て述ぶる方法がそれであるとして居るらしい。曰く、「本書に論ずる所は、一部分實驗的教育學に於て用ひらるる方法を採用した。而して私が二ヶ年間「兒童の家」に於て經驗したる結果を錄したるもので

あるが、今は唯三歳乃至六歳の兒童に施したる方法の初歩を提供するに過ぎない。併し私は信ずる、是等批評的實驗は、驚くべき結果を示せるが故に、之と同種類の研究を繼續するの興味を、讀者に與ふる事が少くないと。

實に吾等の教育的系統は、其の結果の見るべきものなきにあらずと雖、さりとて未だ完成せられたるものではない、併しそは尋常小學の初年級及び苟くも兒童を教育する機關ならば、何處に用ひても適用の出來る一系統をなしてゐる』と。

「モンテッソリー教育法」に述ぶる所は、女史が最近二ヶ年間の經驗(女史に言はすれば實驗を述べたものに過ぎないけれども、所謂羅馬は一日に建てられずして、其の普通兒教育は異常兒教育時代のものが準備となり、異常兒教育はイター、セガンの積みたる十餘年の經驗に基きたるものなれば、其の淵源は誠に深遠である。女史は曰く、『我が現在の事業が、單に二ヶ年の研究より湧出したとのみでは未だ盡されない所がある。私は本書に記述する所が、單に最近の計劃のみより出たとは信じない、我が「兒童の家」にて用ひたる教育的系統の起原は、遙に遠いのである。而して是等普通兒に施せる實驗は、甚だ簡單の樣に見えるけれども、這は異常兒に對する從來の教育的經驗より來りしものなることを考ふる時は、今の我が教育法は、長き間熟練せる努力の一系統である事を忘れてはならぬ』と。

精神病院の助手となる

第二　異常兒教育時代

一九一七(八年の頃、女史は羅馬大學附屬の精神病院(Psychiatric Clinic of the University of Rome)の助手となり、當時屢々諸所の瘋癲病院(Iusane asylums)を歴訪して診察をなし、又自分の病院へ引取るべき患者の選定をもしたので、自然に白痴兒に興味を感ずる樣になつた。當時は白痴兒も同じく瘋癲病院に收容されて居たからである。

當時軟骨療法の非常に發達したる結果として、醫師の注意は異常兒に引き付けられ、女史自身も亦病院勤務の任期が滿ちたので、其の注意を兒童病の研究に向けた。

斯く白痴兒に興味を抱く樣になつたので、女史はエドワード、セガンの創意に成れる特殊教育法に通ずるに至つた。

當時の醫學界は、聾者・痲痺患者・佝僂病其の他種々なる患者に對して、教育的取扱をなすのが効果大なりといふ問題が八釜しくなつて、患者の取扱上教育學は醫學と提携せねばならぬと主張され、體操を以て病を治するが得策なりとの說が高調された。女史も此問題を徹底的に研究せんと志して取調べたる結果、多くの點に於て同職のものと其意見を異にし、心的缺陷の救濟は醫學的問題たるよりは、寧ろ教育的問題なりと感じて居た。其の頃丁度醫學會議が開かれて、低能兒 (feeble minded) の取扱並に教育に關する醫學的方法に關して多く論爭せられた。玆に於て門氏は一八九八年チユリンの教育會議に於て、道德教育に關する一場の演說を試み、豫て懷抱せる異見(醫學的問題たるよりは教育的問題たりとの)を發表したが、世間の人も大分其の方に傾いて居たと見えて、女史の說は醫師・小學教員の間に喧傳せられ、其の結果當時の文部大臣にして門氏の舊師

たるダイドー、バケリー (Guiode Baeelli) 氏の依賴によりて、羅馬の教員のために低能兒教育を說いたのである。

更に進みて遂に國立異常兒學校の設立となつたので、二ヶ年以上女史は此の學校を經營した。間もなく有志の寄附によりて、校內に醫學的教育所 (Medical Pedagogic Institute) は附設せられ、小學校並に瘋癲養育院より多くの白痴兒を收容した。『私は同僚の助によりて、此の二ヶ年を教員の養成に費し、低能兒の觀察並に教育に關する特殊の教育方法を授けた。當時私は異常兒教育の實地視察の爲倫敦並に巴里に往きし後であつたから、單に教員を養成するのみならず、更に重大なる事業に從事した。それは私自身を兒童の實地教育に捧げて、自ら教鞭を執つたのである。而して同時に私の學校にて教鞭を執つて居る教員達の指導をも怠らなかつた。

當時私は小學校教師以上であつた。毎日學校に出席して朝の八時より晩の七時迄、間斷なく兒童を教へたのである。此の二年間教務を

實行した事は、教育學上に於ける私の最初の、而も眞の階段であつた』

異常兒教育と普通兒教育との異同

私が初めて異常兒教育に從事した抑、の初めから(一八九八――一九〇〇)、異常兒教育は特に白痴兒に限るべきものでなく、普通兒にでも同一原理を應用する事が出來るのであつて、之によつて未成熟なる心意(普通兒の發達せぬもの)を成長せしむる事が出來ると信じて居た。其の後此の感情(信念)は愈々深くなりて、殆ど直覺的となり(理由の說明は出來ないが、それに相違ないと信ずるのが直覺的)、私が異常兒學校を去りて後は此の信念は愈、鞏固となり、次第に異常兒教育法を普通兒に施すならば、不可思議、驚くべき程度に於て兒童の人格を開展せしむるであらうと確信した。茲に於て所謂治療教育學 (renedial petagogy) と呼ばれたる學問にして、眞正に又十二分の研究を企てて見たいと思つたのは、正に當時のことであつた。而して其の際、普通教育學 (Normal petagogy) 並に教育學原理を研究せんが爲に、再び大學哲學科に入つたが、一大信念は私を鼓舞し、遂に教育學の思想を深め廣める爲に、一切從來の職を拋つた。併し斯かる處置に出でたる事の是非は、證明する事は出來なかつたが、實に私は一の知られざる天職に對して修養して居る樣であつた。

異常兒教育の起原　イタール氏

異常兒教育法の起原は佛國革命時代に在りて、其の元祖は一醫師である。而も醫師として貢獻する所頗る多く、醫術史上に一異彩を放つ程の人であつて、現今 Otiatria 即ち耳疾學として有名なる醫學の一分科を創設した人である。

氏は聽覺の系統的教育法を企圖したる元祖であつて、ペレー氏の創設にかゝれる巴里の聾啞學校に於て實驗し、現に半聾者をして明かに聽取せしむる事に成功した。其の後八年間、有名なる野生兒アバイヨン後に出づ)の教育を司るに至りて、從來既に大成功を收めたる聽覺教育を凡ての感覺教育法に適用する樣になつた。這はピネー (Pinel) の學者イタール (Itard) 氏其人にして、氏は生徒の觀察を實施した最初の教育者である。其の方法は病院にて患者殊に神經系統の疾患により苦しめる患者を觀察するのと同一方法を用ひた。

イター氏の教育に關する著者は、教育的努力を最も興味あり且最も精細に叙述したものであつて、今之を繙くものはイター氏が實驗心理學の鼻祖たることを許さねばならぬけれども、異常兒に對する眞正教育的なる一系統を完成したものは誰かと問はば、我等はエドワード、セガン其の人を推さねばならぬ。氏は初め教員で後に醫師となつた人である。

エドワード、セガン氏

氏は研究の出發點としてイター氏の實驗を採用し、瘋癲養育院や巴里のルー、ビカーユといふ小さな學校の兒童に對して、十ヶ年間の實驗を施す間にイターの實驗を改良し完成した。此の實驗は一八四六年初めて巴里に於て、六百頁以上の冊子として發行された。書名は「白痴兒の道德衛生及び教育論」(Traitmet Moral Hygiene et Education des Idiats)と稱した。其の後セガンは北米合衆國に移住して、其の地に數多の異常兒教育所を起し、又渡米後二十年の實驗を重ねたる後、其の教育法に關して第二の書を公にした。而かも名稱は前者と餘程異つてゐる。即ち「白痴兒と其の生理的取扱法」(Lotiocy and its Treatmentby the Physiological Method)がそれである。

此の書は紐育に於て一八八六年に出版された。此の書に於てセガン氏は嚴に其の教育法を限定して、呼ぶに「生理的方法」の名を以てし、決して「白痴兒教育法」とは呼ばずに(白痴の教育に限つた事はないから)、前述の如き名稱を用ひた』。右に述ぶるが如くイター氏教育法の特徴は、心理的取扱に重きを置く點である。勿論教育學は常に心理學を基礎とするものであるけれども、ゲントは心理學の基礎として生理學を重んじたるを思へば、イターとゲントの思想は、或點に於て大に一致する所がある。此の一致點は大に門氏の注意を惹き、兩者の間に何等かの聯結があるのでなからうか、といふ疑問が生じたのである。

『私が精神病院の助手であつた時に、エドワード・セガンの佛蘭西書を多大の興味を以て讀んだ。併し其の後二十年にして出版された英書は、ブルネビユ(佛人)の特殊教育論中に引用されてあるにも拘はらず、何の圖書館にも見當らない。私は此の書を漁り出さんが爲に、殆んど凡ての英國醫師、而も異常兒教育に趣味を有するものを歴訪して見たが無効であつ

歐洲視察

た。此の書物が英語にて述べられてあるにも拘はらず、英國にて知られないといふ事實は、セガンの系統が英國に於て了解されて居ないといふ事を證して居る。實はセガンは絶えず異常兒教育機關に關する凡ての著書に引用され、教育的應用が說明されてあるけれども、併し眞にセガンの精神を汲むものに至りては寥々曉星の如しであつた』。

殆んど何處にても異常兒に適用されたる方法は、普通兒に用ふるものと大同小異である。殊に獨逸に於ては、私の視察を助くる爲に、其所へ同行した一友人の見る所に依れば、同國異常兒學校の附屬教育博物館には、そこここにセンガの特殊材料は陳列してあるけれども、そは殆ど使用されれた事がない。蓋し獨逸教育者の考ふる所に依れば、異常兒教育法は普通兒に施す所と略々同一で良いと。女史は獨逸を經て佛國へ行つたが、此の國にては遉がにセガンの方法が少からず行はれて居る。然も唯其の外形を模するに止まり、其の眞意骨髓に至りては行はれて居ない。然るに伊太利に於ては却つてセガン教育法の主觀的方法、即ち眞意が了解

視察後の實地研究

されて居るのに、佛國にては其の客觀的方面のみを模して居た。

『ビゼー(Bicetre)には暫く滯在したが、其處には主としてセガンの教具が使用されて居るだけで、其の精神に至つては殆んど取つて居ない。其の僻セガンの教科書を教師は手にして居るけれども、教育法は全然機械的にて、各教師は文字に拘泥して其の規則に追隨するばかりである。

斯くて私は倫敦へ行つても巴里へ行つても、新しき意見と新しき經驗とを得んとするの望みは、全く幻影なる事を了解した。蓋しセガン自らは此の方法を以てせば、白痴の教育は現實可能であると屢〻宣言して居るから、實は大なる希望を以て視察を遂げたが、實際無効であつた。

歐洲を歴訪して教育法を研究した後、私は羅馬の異常兒に對する私の教育的實驗を繰め、更に二ヶ年間之が教育を續けた。私は主としてセガンの書物に從つたけれども、又イターの有名なる實驗より、多大の助を得た。是等兩先輩の著書に導かれて、私は種々なる教具(didactic Material)を製造した。

異常兒教育失敗の原因

是等の教具は何處の學校にも餘り見當らない、即ち全然私の創意に成れるものにして、其の使用法を承知せる者に取りては、最も著しく最も有効なる手段となつた。併し正しく之を示すにあらざれば、巧に使用せずば、以て兒童の注意を惹きつけるには足りないのである』。

本講の最初に一言しておいた如く、モンテッソリー女史は其の異常兒教育時代に於て、既に普通教育に興味を有するに至つた。其の理は、是れ亦既に述べたるが如く、兩者は根本的の相違でない事にも依るべけれど、更に他の重要なる理由が二ッある。一は異常兒の教師自身に其の方法上の缺陷あるものにして、他は被教育者側に於て、到底完全なる發達を遂ぐるに足るべき素質のないことである。

斯くして大抵異常兒教育者は、其の事業を中止するのであつて、女史は亦其の數に洩れなかつたのである。第一の原因は、教師は被教育者と同一水平面に其の身を置かざるべからず、無邪氣にして子供らしくなければならないとの偏見は、異常兒の教師を一種の無感覺者と惰落せしむるのである。一般に教師は、自己は劣等なる人格を教育して居るとの事實を承認して居るが、それこそ失敗の原因である。されば普通の幼兒を教育するものでも、屢々次の如き考で居る。彼等教育者は赤兒を教へて居る。而して自分自身を子供の水平面に置かん事を求め、兒童に近づくに遊戯を以てし、或は又馬鹿げたお伽噺を以て近づく事も珍らしくない。

斯くせんよりは、吾等は子供の心靈の中に蟄伏せる「人」を覺醒せしむるの術を知らねばならぬ、といふことを直覺的に感じた。而して教育は教具を以てするにあらずして、兒童に呼びかけ、兒童をして覺醒せしめる聲によりて行はるるものである。斯くて後教具の使用を奬勵し、之に依りて兒童は自身を教育するものであると信ずる、要するに教育者と被教育者の精神と、相接解せねばならぬと。

要するに兒童を餘りに赤兒扱にせず、其の人格の中心に潜める、貴き內部生命を覺醒せしめねば、教育の効果は決して擧がる者でない。セガンも亦此精神を覺醒する方面を重んじ、其の創作にかゝれる教具の如きも、

教師の風采態度

之を精神修養の方面に善用せしめねばならぬ。『セガン』も亦此の題目に就いては同じ方式を發表して居る。此の氣永い計劃教育法』を讀んで、私は明かに『セガン』の使用した最初の教具は、精神的のもの(spiritual)なる事を知つた。氏は佛蘭西書の終りに於て結論を草し、寧ろ悲痛の調を以て下の如く言つて居る。「氏が建設せる所の凡ては、若しも良教師を養ふ事が出來なかつたならば、滅亡するか將た無益に終るかである」と、氏は異常兒の教師を養成すべきに關しては、寧ろ創見を有して居る。氏は教師の風采を一寸見ても氣持のよい、聲も良く、身嗜もよく、一事一行兒童を引付ける力がなくてはならぬ。氏曰く、教師は聲に於て態度に於て、人を引付ける所がなくてはならぬ、蓋し教師の職は、軟弱にして倦怠し易き兒童の心靈を覺醒して、生命の美と力とを確持すべく、前進せしめねばならぬからであると。

被教育者の精神上に作動せねばならぬとの信仰は、宛ら一種の關鍵となりて、エドワード・セガンがさしもに精密に分解したる教授的實驗の一聯系が、其の秘奥を我が前に開いた。蓋し是等の實驗は之を適當に了解したならば、白痴の教育上最も効果あるものである。私自身は、是等を應用する事に依りて最も驚くべき効果を擧げた。併し私は自白するが、汝の努力が生徒の知的開展上に効果を現はしたるにも拘はらず、一種の勢力衰退の徵候が私を襲ふた。言はゞ私自分の活力を子供に捧げた樣であつた。然れども我等の勇氣、快活、愛、尊敬など稱する者が、人間の心靈より描き出さるるのである「異常兒の心靈の中に潜在するもの」。而して益〻自由に是等の諸德を與ふれば、愈〻我が周邊の生命(白痴兒の生命)を新にし、勢力づける事が出來るのである。

斯く修養を積んだ後、私は自ら獨立に新らしき實驗に入る事が出來た。併し今は其の實驗を報告する時ではない。唯私は自分の發明した方法にて、讀方書方を教へんとする計劃であるといふ事を述ぶるに止めよう。一體兒童に對する讀方教授は、イター、セガン共に其の方法が不完全であつた樣に思はれる。

異常兒教育の成功

私は嘗て養育院の白痴の一群に讀方書方を教へたが、普通兒同樣に公立學校の入學試驗を受け、而かも首尾よく合格するまでに成効した。

是等の結果は、他人の目には殆んど奇蹟の如く見えた。併し私にとりては養育院の白痴兒が普通兒と競爭する事の出來たのは、特別な方法で教育されたからで、何も不思議なことではなかつた。白痴兒は其の精神的發達に於て助長せられたけれども、普通兒等は其の發達が絶滅せられ、後退せしめられてあつたからである。此に於て私は思つた。他日是等の白痴兒を驚くべき程度に發達せしめた特別の教育法を普通兒に施すの日があつたならば、普通兒はドシ〳〵進歩して、私の友人等が奇蹟と見做して居たのは、何も奇蹟でなくなるであらう。(特別教育法を普通兒に施すならば、彼等はドシ〳〵進歩し、白痴兒は到底之に追及する能はずして、白痴兒普通兒の差は依然として大であらう。然るに今日普通兒は、一般學校に受くる不完全の教育の爲に其發達を害せられ、白痴兒のみ門氏の新教育法を受くるが故に兩者の差餘りに大ならずして、人之を奇蹟呼はりするに至つたのである)。

白痴兒の劣等なる精神と、普通兒の精神との間に在る溝渠は、若しも普通兒が其の發達の頂點に達したならば、何人も之に橋渠を架する事は出來ない。詳言すれば普通兒の教育法を改善して、極度まで其の發達を遂げしめたならば、普通兒と白痴兒との差は依然として大なるのである。

是に於てか人々は、我が白痴兒の進歩を賞賛しつつある間に、一般學校の幸福なる健全なる普通兒が、何故知識の試驗に於て我が白痴兒と同樣の成績を得るまで、低き水平線上に彷徨せざるべからざるかの原理を穿鑿し始めた』。

以上普通兒の教育を完全にしたならば、異常兒は到底其の側へも寄れぬ程の差異を生ずと論じ、而して何故白痴兒は、普通兒に及ばざる事然かく遠きかと言はゞ、是れ發展の素質が先天的に不完成なるに依るものにして、多くの異常兒教育者が匙を投げるのも之によるものにして、既に述べたるが如く異常兒教育中止の第二因となるのである、此の點を詳說

せんが爲に、女史はバイブルの文句を引用して居る。『或日異常兒學校の教師は、エゼキール (Ezekiel) の豫言の一節を私にも讀んで見よとて示した。是れは恰も異常兒教育を預言するが如く見えたから、深き印象を此の教師に與へたらしく思はれる。

神は御手を私に加へて、神の御心もて私を連れ出し、或谿谷に伴はれしが、其處は枯骨を以て充たされて居た。私は其の周邊を通過せしめられた。見れば廣き谷間に充ち滿ちて、何れも白骨となつてゐる。

神の宣ふ樣、人の子よ、是等の枯骨が蘇生し得るであらうか。私は答へた、尊き神よ、アナタが御承知です(凡人には分りません)。

神は重ねて宣ふ樣、是等の枯骨に說いて言へ、オー汝白骨よ、神の御聲を聞けと。

斯くて神は枯骨に向つて宣へり。見よ我は汝に呼吸を與へん、而して汝等は玆に生くべし。余は汝に腱と肉とを與へ、皮膚を以て汝を掩はん。又氣息を供すべし、玆に汝等は生くべし。と

(註)異常兒は到底完全に教育し得るものにあらざる旨を「バイブル」の文句を引用して證明す

私は神より命ぜられたる如く、說いて言つた。而して私が詞を始むると忽ち騷擾の聲起り、大地振動して互に離散せる白骨は各自相集りて、一骨骼を構成した。腱と肉とは各自の上に來り、皮膚は其の上を掩ふた。けれども未だ息(イキ)をせぬ其の時、神は又私に宣ふ樣風に說いて言へ、人の子よ風に言へ。

斯くて神は宣へり。四方の風よ來れ、呼吸よ來れ。是等の死者に氣息を入れて之を甦らしめよ。

私は主の命ぜる儘に風に詞をかけた。而して氣息は死屍に入りて蘇生し、彼等は突つ立ちて一大軍隊を成した。

其の時主は私に言へり。人の子よ、是等の骨はイスラエルの全家族である。彼等の言ふ所を聞け、『我等の骨は枯槁し、我等の望は失はれてゐる。我等は部分々々に切斷されてゐる』。

實に聖書の詞なる「余は汝に氣息を與へて蘇生せしむべし」は、セガンの全教育法を概括せる根本的文句なる、『言はゞ手を取りて兒童を導き、筋肉

系統の教育より神經系統並に感覺の教育に進むべし』を想起せしむる。

セガンが白痴を教育せる際には、歩行の仕方、及び最も困難なる身體運動例へば階段を上り、若くば飛躍運動をなす際等に於ける身體の維持方法を教へ、最後に物に觸れしめて觸覺の練習をなさしめ、溫度の差を認識せしめ、其の他各感覺の教育を以て終るのである。

併し單に此の感覺教育に止りてそれ以上に出でないならば、兒童を低度の生活即ち殆んど植物的生活に留らしむるのである。聖書には『精神に呼びかけよ、精神は彼に進入して、之が爲に生命を有するに至るであらう』と。實にセガンは白痴を植物的生活より知覺生活に導き、感覺教育より一般概念に、一般概念より抽象的思考に、抽象的思考より道德に導いたのである。併しながら此の驚くべき事業が完成し、其の精細なる生理的分解と方法上に於ける漸次の進歩とによりて、白痴が大人となりし時に、白痴兒は依然同胞人類の間に立ちて劣等であつて、決して完全に自己を其の社會境に順應せしむることは出來ない。恰も『我等の骨は枯稿し我等の希望は失はれ、吾等は各部分々々に切斷されてある』と言へるに類して居る。

イター、セガンを精研す

是れ畢竟、何故にセガンのくどくどしき方法が、屢放擲せられ、其の方法の困難なる爲に遂に其の終りを完うせぬかの理由を示して居る。凡ての人は異常兒教育の困難なるを難じ、以て多數の者は下の如く言つて居る。『まだ〳〵普通兒に對して何程でも施す餘地がある』(異常兒教育にのみ全力を注がずとも)と。

要するにセガンは生理的方面の教育より精神教育に及ぼさんとし、寧ろ後者を重んじて前者を手段と見たのであるが(門氏感覺教育に於ても之に依りて精神教育を成遂せんとする者にして、此の點セガンの影響によるは注意すべき事である)、如何にせん異常兒は、其の素質に於て先天的に不完全なるが爲に、結局普通兒と伍する事は出來ないのであつて、門氏が異常兒教育を斷念した一理由である。『現在實驗することによりて、セガンの教育法に對する私の信念を証明したからして、私は一先づ異常兒

に對する實際教育を中心して、イターとセガンの著書を徹底的に研究し始めた。而して私は兩先輩の眞意を體得せんが爲には沈思熟考するの要を感じ、前代未聞の一事に着手した。それは恐らく學者の爲すを好まぬ一事であると思ふ。即ち上述兩先輩の著述を伊太利語に飜譯し、且之を始めより終りまで一字も殘さず手寫した。恰も未だ印刷術の開けない古代に於て「ベネディクト」派の僧の企てたる如く、私自身に書物を拵へたのである。

私が手づから之を寫し取つた理由は、之に依りて一語一語の意義を考覈するの時間を贏ち得て、實際著者の精神を讀破せんが爲であつた。

私がセガンの佛蘭西書六百頁を寫し終つた時、偶々ニューヨークから一八六六年に出版されたセガンの英書が一部手に入つた。此の古き書物は、ニューヨークの一醫師の私有圖書館の廢本中から見出したものである。

私は英國友人の助けに依りて之を飜譯した。尤も此の書は、教育的實驗の上には餘り多く利する所はなかつたけれども、第一の書(佛蘭西書)に記述せる實驗の哲理に論及する所が多かつた。蓋し三十年間異常兒を研究したるセガンは、其の生理的方法(即ち之が基礎として生徒の個別的研究を有し、且生理的並に心理的現象を分解して、教育的方法を形成せる所謂生理的方法)は、又一般普通兒にも適用し得らるゝに相違ないといふ思想を表明したのである。實にや氏は之を以て人類の改造が可能であると信じて居たのである。

實にセガンの聲は、荒野に絶叫する先達の聲の如くにして、私の心は、氏の働きの偉大と重要とを以て充たされた。氏の事業は、確かに學校と教育の改造を可能ならしむるものである。

當時私は、哲學科の學生として再び大學に入學し、實驗心理學を修めて居た。此の學科は僅かに其の頃伊太利に設けられたもので、即ちチューリンと羅馬とネーブルとに開講されてゐた計りであつた。同時に私は、小學校に於て人類學的教育學の實驗を行つた。斯くして組織的に、普通

兒教育に用ふべき方法を研究したのである。又之を緣として羅馬大學で、教育的人類學を講義をもした』。

普通兒教育時代

第三　普通教育時代

『私は永く異常兒に施したる實驗法を、普通兒の小學初年級に應用して見たいと渴望して居た。決して之を家庭若くは最幼年の教育さるゝ一機關(兒童の家)に應用せんなどゝは思はなかつた。然るに此の新思想(即ち幼稚園時代の教育に應用せんとする思想)を私の心に持ち來らしめたのは、それは全く偶然の機會であつたのである。當時私はミランに開催せられた萬國博覽會に於て、科學的教育學並に實驗心理學に關する事項の審査委員に任命されて居たが、任を果たして羅馬に歸つたのが一九〇六年の末であつた。一大機會は私の身の上に降りかゝつて、私は羅馬家屋改良會社の社長エドワード、タラモー氏より招聘せられ、其の模範的貸長屋に於ける、幼兒教育所の組織を托されたのである。

家屋改良會社長タラモー氏の招聘

タラモー閣下(タ氏は休職の將官と見えてDirector generalといひ、或は閣下の敬稱を附してある)の寛仁なる考案によりて、長屋に住する家族中に三歳乃至七歳の幼兒を悉く一所に集めて、之を教育せんとするのである。是等幼兒の遊戯並に作業は、一教師指導の下に遂行せしめようとする。而かも其の教師たるや、必らず長屋の一部に住するものでなくてはならない。而して家毎に(一軒の家屋に數十家族住す)一校を設くる設計である。當時家屋改良會社は、羅馬に於て既に四百軒以上の家屋を有して居たからして、此の教育事業は驚くべき發展の餘地を有して居たのである。

第一兒童の家の開設

第一の學校は、一九〇七年正月サン、ロレンゾ(長屋所在地の一)の大なる長屋の中に設置さるゝ筈である。此の地に於て會社は既に五十八の建築物を有つて居たからして、タラモー閣下の計劃によれば、我等は是等「家の中の學校」を十六だけ開校し得ることになつて居る。

是等の一種新らしき學校は、オルガ、ロディー夫人に依りて「兒童の家」Casa dei Bambini といふ幸福な名を與へられた。夫人はタラモー氏と私との

兩人に親しい人である。此の名稱の下に、最初の教育所は一九〇七年正月六日を以て、マルシ街五十八番地に開設された。主任教師はカンディー、ヌクチテリーであつたが、私の保護と指導の下に在るは申すまでもない。抑〻の初めから私は斯かる組織は社會的に教育的に、甚だ重要なるものであることを知つた。而して最初は將來の勝利に對する私の抱負は少し誇大された樣に見えたが、今日では私の豫想した所は實際眞實であつた事を悟り始むる樣になつた。

第二兒童の家

同じく一九〇七年四月七日、第二の「兒童の家」はサン、ロレンゾの地域に開かれ、翌一九〇八年十月十八日、今一つミランなるフューマニタリアン宗の團體によりて、勞働者の住せる地域に開設せられた。此の團體に附屬せる工場は、我等の使用せる教具の製造を企てた。同年十一月四日に第三「兒童の家」は羅馬に設けられた。之は貧民窟ではなくて、學校も中流の住居に適する現代式建物にして、所在地は羅馬中の一部を成せるプラチディ・カステロ中のファマゴスタ街であつた。又一九〇九年正月伊太利領瑞

第三兒童の家

西(Italian Suitzerland)の孤兒院、並にフレーベル式幼稚園を兒童の家に改造して、我等の教育法と教材とを採用した』。

兒童の家の必要
一、教育的意義
二、社會的意義

右述べたる所に依りて門氏教育法の沿革は終つた譯であるが、女史は本章の結論として、『兒童の家』は二重の意味にて必要なりとの旨を述べて居る。即ち一は教育的意義にして、女史の教育法は異常兒教育法より換骨脫胎したものであるが、最幼兒時代は普通兒と雖異常兒に類する所があるからして、前者の教育法を後者に應用するを有効なりとし、これに因みて最幼兒教育の必要なる所以を力說し、第二は社會的意義にして、兒童の家の設立は之を手始めに、貧民社會の改造が出來るといふのが女史の理想である。此の點に關しては次講を參照せば明解する事が出來る。

兎に角以上の意味にて兒童の家は千鈞の價ありとし、先づ第一の意義に從つて、如何なる効力あるかを下に說いて居る。『既に述べたるが如く、私はタラモー閣下の招聘によりて、異常兒教育法を普通兒に及ぼす機會を得たのである。勿論小學校時代の兒童ではなく、幼稚園時代の子供に施

したのである。

若し異常兒と普通兒との間に並行が可能であるとすれば、そは最初兒の時代である。蓋し此の時期に於ては發達すべき力を有せぬ兒と、未だ發達せざる兒とに一種の共通點が存するからである。

最幼兒は未だ筋肉運動の確實なる協力(コーヴァイネーション)諸筋肉が協同して働き、以て調節運動を營むこと)を得ないで、歩行は之が爲に不完全に、又衣服の着脱の如き普通生活上の動作を完成することも出來ない。感覺機關例へば眼の調節力の如きも、未だ充分に發達せず、詞も亦原始的にして、最幼兒の談話は一般に缺陥が多い。

其の他注意の集中、靜肅の維持の困難等は、普通幼兒と異常兒とに共通である。ブライエルは又其の兒童心理の研究に於て、病的なる言語缺陥(異常兒)と、發達の途中に在る普通兒との間に於ける併行を說明して居る。されば白痴兒の心的人格を發達せしむる方法は、之を以て普通幼兒の發達に資することが出來る。而して普通人間の全人格の治療的教育を組織するに適する。

蓋し、兒童が言語缺陥の如き慢性的となれる多くの缺陥を有するは、是等を矯正するに最も重要なる時期、即ち三歲乃至六歲の時代に、其の教育を忽にしたに因ることが多い。實に此の時代に於て兒童は其の主要なる動作を形成し、確立する時である。

此の點に於て「兒童の家」の教育的實驗は意義を有する。そは既に異常兒に適用したる方法を普通兒に施したる實驗の一系列である。而して私の事業は決して單にセガンの教育法を普通兒に應用したのみではない、(自分の創意が加はつて居る)そは私の著書を研究する者は直ぐに氣の付くことであらう、併しながら他方に於て此の二年間の經驗は、佛國革命時代の實驗、即ちイタール、セガンが其の生涯に亘れる熱心なる事業に負ふ所大なるも亦明白である。

私の側からいへば、セガンが其の第二の著書を公にしてから三十年の後に於て、私は再び其の思想を繼承し、加ふるに此の偉大の事業其の精神

五十年の經驗

即ちセガンが其の先師イターの遺產より得來れる其の精神をも、私は取り込んだといつても差支はない。

十年間私は我が先輩の教育法に從つて實驗したるのみならず、沈思默考によりて是等の高く尊き事業に注意を集中した。是等の二人は其の隱れたる英雄の最も生氣ある、證左を人類の間に殘留したのである。

されば私の十年間の事業は、或意味に於てイター、セガンによりて爲されたる四十年間の事業を概括したものともいへる。此の點より見て私の爲したる二ヶ年の一見簡單なる實驗も、實は五十年間の發動的事業が之に先ち、之を準備したといつてもよい。又私は、是等の實驗は三醫の繼續的事業を現はすといつて差支ないと思ふ。即ちイターより私に至るまで其の貢獻の程度に多少こそあれ、心理學の道に沿ふて最初の階段を據えたものである。

兎に角人間文明上の確實なる一分子として、「兒童の家」の効績は別冊に收むべき程澤山ある。實に「兒童の家」は社會的並に教育的の問題を、さながら理想鄕であるかの如き態度を以て解決した』と。又以下に述ぶる所は、「兒童の家」の社會的に必要なる所以の解釋である。『蓋し「兒童の家」は家庭を現代的に改造せんとする一部の事業であつて、此の家庭を改造して、地上に無何有鄕を現出せんとすることは、近き將來に於て實現せねばならぬ所である(詳細は次章參照)。斯くて「兒童の家」は、直接社會問題の最も重要なる方面に接觸する。所謂社會問題とは、住民の理想的家庭生活に關するものである(次章參照)。然れども、茲には唯羅馬に於ける第二「兒童の家」を開校するに當つての開校演說を回想し、又タラモー閣下の請により、私の選定した「兒童の家」の規則を示さば充分であらう。

私の述べた(次章の終倶樂部と、施療局即ち外來患者を收容して、內外科的手術を借家人に對しては無料にて施す機關である施療局は、既に建設せられた。現代式長家――一九〇八年十一月四日タラモー閣下の仁慈によりて、プラチ、デイ、カステロに開かれたる――に於ては、既に共同賄所をも加設せんとするの計劃中である。』(詳細は次講參照)

兒童の家の社會化

以上第二講に於ては、第一科學的教育學を建設せんが爲には、其の條件として自由主義によるべきこと、諸實驗的科學に於けるが如く教育學には特別の研究法ありて、本著の全體が其の實例なりとの意味を含ませ、第二異常兒時代及第三普通兒時代の教育法を述べ、最後に「兒童の家」が何故に必要なるかを二つの方面より述べて、第二章の結論としたのである。

第三講　「兒童の家」に於ける開校演説

本講は教育法の理論と直接の關係は少いが、女史教育法の背景ともいふべきものであるから、固より之を明かにする必要はある。然れども詳細は拙著「モンテッソリー教育法と其の應用」に紹介したれば、今は唯極めて大體を説明するに止めよう。

女史が「兒童の家」を建設したる動機ともいふべきは、多くの貧民窟に於ける慘狀を目のあたり目擊したるに由因する。而して最初「兒童の家」を建設したるは、サン・ロレンゾの街であるが、此の地は一般人民の居住する

食民窟の慘狀

所でなく、極めて僅少なる勞銀によりて生活する下層勞働者、又は無業職人の徒、或は出獄後未だ監視の中にある者などの群居する所である。從つて家屋の如きも社會的若くは衛生的に顧慮されたものでなく、又特に勞働者向に出來ても居ない所より、室數餘りに多きに過ぎ、「又貸し」といふ樣な事も行はるゝに至つた。

然かのみならず群居生活の弊として、混雜、不德、罪惡の如きは殆んど常の如くに行はれ、是等の事實を毎日見聞する兒童自身は、更に憐むべき境遇といはざるを得ない。彼等は暗黑なる室に於て生れ、而して幾多の忌はしき事實を見聞しつゝ生長するのであるから、家庭の樂を享受するが如き事は決して望まれない。

是等の慘狀を救濟せんとして、既に多くの救濟法は施されたが、何れも只一時的にして、且少數者を救濟するに過ぎざるものであつたが、最も組織的にして永久的に救濟の地歩を占め得たものは、實に家屋改良會社であつたのである。

改良長屋

羅馬の家屋改良會社はエドワード・タラモー氏の創作的計劃にして、其の目的とする所は、長屋を整理し改造するに在る。現に五十八棟千六百戸を有して居る。サン・ロレンゾの貧民窟も此の會社によりて、長屋は理想的に改築せられ、貧民は永遠に救濟せらるゝ事となつたのである。即ち從來の雜居的構造を改めて家族的生活に適せしめ、採光通風其の宜しきを得、一戸の室數を少くし、梯子段の數を增し、廣庭をさへ設けて更に美觀を添へしめた。

斯くて彼等貧民は各家族各別に住する事を得て、一面家族の團欒を樂しみ、他面雜居によりて行はるゝ幾多の不道德的、不衞生的なる痛ましき惡結果は、根本的に防渴さるゝに至り、茲に初めて是等貧民の生活に、自由なる感と家庭てふ和かき情操とを添ふるに至つたのである。

精神的租稅

併しながら斯くの如く理想的に改良せられたる長屋に住する者は、此の善美なる建物に對して、永久に其の善美を樂しまんとせば、家に對する注意と善意との租稅を拂はねばならぬ、換言すれば常に洒掃に力めて、清潔を存續せしめなければならぬ。注意と善意とを以て家を維持するといふ、一種の精神的租稅を納めなければならぬ。而して家を尊重し、其の清潔を保有したものには、相當の褒賞をも與へることになつて居る。

兒童の家の社會化

かくて借家人の精神的租稅に依りて家の清潔を維持す事は出來る樣であるが、茲に一ッ困難を感ずるのは、固より夫婦共に外に出て勞働に從事するのであるから、父母の家を出でたる後幼兒は家に止まり、父母より如何に家の尊重すべきを諭さるゝも、之を理解し得る筈もなく、壁や梯子段を損傷する事が夥しい。是に於てか是等の幼兒を收容して敎育すべく、「兒童の家」は出來たのである。而して今や父母は「兒童の家」に其の子を托して、安んじて最も自由に其の業に從事する事が出來るに至つた。

以上は「兒童の家」の敎育的必要を講じたのであるが、女史は進んで之を社會的必要上、更に完全なるものと爲さんとして居る。即ち其の家を社會化せんとしたる事である。

抑〻女史の理想とする所は、此の長屋全體を一家族と見て、兒童の家に於

て幼兒の哺育教養を一手に引受け、父母をして安らかに社會的業務に服せしめんとするのである。而して尙將來に於ては共同病院を設けて、母に代りて患者を看護し、又、共同炊事場をも設けて長屋全體に食物の供給をなし、外に出でて働かんとする者に、大なる利便を與へたいといふ理想を抱いて居る。然のみならず「兒童の家」を擴充したる一大家族の教育機關として、將來長屋内に倶樂部、圖書館を設け、又時としては講演會を開催して、住民の知德を促進せしめ、賭博場や銘酒店の自然の間に閉鎖せんことを希望して居る。

畢竟するに女史は社會の分業法を應用せんとするものにして、住民をして、各其の適する業務に從事せしめんとするに外ならない。殊に從來屢〻社會上の問題となりて、而も未だ解決せられざる婦人勞働問題の如き、女史の言に從へば、今日の社會的經濟的進歩は、婦人勞働者を要求する事が多い、從つて吾等の組織せる「兒童の家」は、其の婦人の家庭的天職、即ち母たるの職能、婦人たるの義務を果さんとするのであると。

以上は女史の開校演說の極めて概略を講じたるに過ぎないが、之を要するに、女史が「兒童の家」に於て現に實行し居ること、及び將來改善せんとする理想を述べたのである。兎に角「兒童の家」が、如何に教育的社會的意義を有するかを知るべく、又貧民窟の住民が如何に幸福なる境遇に向ひつゝあるか、女史演說の冒頭に曰く、『往いて此の暗憺たる貧家を見よ、今や恐怖と困窮との眞只中に、幸福、清潔、平和の幕は下された。貧民は此に理想的の家を有し、而もそは自分自身のものである。貧と罪惡とを以て支配して居た地域は、今や道德的回復は行はれつゝある。即ち貧者の心靈は罪惡の麻痺、無智の暗より逃れ出でんとして居る。彼等の幼兒も亦自分の家を有して、而も悲慘は絶滅せられて其の痕を留めざる新時代に遭遇せんとして前進しつゝある。彼等の犯せる幾多の罪惡、困窮せし不幸の洞穴は今や夢と過ぎ、其の痕跡をだに人生に於て見出し得ぬまで、自由にして幸福なる境遇に遭遇せんとして居る』と。

「兒童の家」の規則

第一條　羅馬家屋改良會社は、今般其の共同長屋の內に第何號、兒童の家」を設立し、其の住民の子女にして學齡以下のものを收容す。

第二條　「兒童の家」は、主として父母共に勞働に從事する故を以て、其の子女を教育する餘暇なきものの幼兒に對し、無月謝にて其の身體的保護を與ふるを以て目的とす。

第三條　「兒童の家」にては、其の心身の發達に適應して、子女の教育、健康幷に身體的道德的進捗に留意するものとす。

第四條　「兒童の家」には、女教師・校醫・保姆を置く。

第五條　「兒童の家」に於ける細則・時間割は女教師之を定む。

第六條　長屋に屬する三歲以上七歲以下の兒童は凡て入學する事を得。

第七條　「兒童の家」に入る幼兒に對しては、凡て月謝を徵集せず。但し父母は左の諸件に注意するを要す。

1. 一定の時刻に出席せしめ、身體・被服を淸潔にし、適當なる前掛を調製すること。
2. 「兒童の家」の教師並に關係者に最大の敬意を表し、幼兒の教育上に關しては教師と協力し、少くとも每週一回母親は教師に面會し、幼兒の家庭に於ける生活狀態を語り、且教師より必要なる忠告を受くること。

第八條　左の諸項の一に該當するものは除名す。

1. 沐浴を怠り汚服を纏へるもの。
2. 到底教育の見込なきもの。
3. 「兒童の家」に關係せる人々に敬意を缺き、若くは不德なる行爲によりて、教育的作業を破壞するものの子女。

以上

第四講　「兒童の家」に適用されたる教育的方法

人類學的實驗

題して教育的方法といふけれども、其の教育法の全體を述べたるものでなく、專ら幼兒の發育の狀況を人類學的に實驗研究する方法を述べたるものである。人類學的研究は大體之を二ッに分ち、其の一は專門家の特別攻究に屬するものにして、人類學的並に醫學的知識技能に堪能なるものでなくては出來ない部分であつて、女史の學校にては專ら校醫をして之を掌らしめる。而して他の一は身長・體重等普通の教師の爲し得る測定である。要するに人類學的研究とは、念の入りたる體格檢査と見れば大差ない。モンテッソリー女史の著には、「教育的人類學」といふ浩瀚の書籍がある。こは人間の身重・體重・頭蓋・顏面・胸骨・骨盤等の形態性質等を精細に研究し、それ等の形態性質如何に依りて人間の典型を鑑識し、其の精神狀態までを推定して、之を教育上に利用せんとする計劃である。言はば科學的骨相鑑識法ともいふべきものにして、教育者の大に心得べき事柄を書きたる書である。

既に第一講の初めに述べたるが如く、セルギー氏は、教育は被教育者を系統的に研究せねばならぬと言ふが、教育的人類學は身體的方面より、之を研究する方法を論じたものである。余は近き將來に於て、此の「教育的人類學」を紹介して見ようと思つて居るが、取敢へず上述の事を述べて本講了解の一助に供して置くのである。

兒童心理の研究は觀察に依るの外なし

女史は自分の管理せる學校、即ち「兒童の家」に於て實驗せる結果を蒐集して、科學的實驗的教育學並に兒童心理學を建設せんとの一大抱負を有して居たのである。尤も兒童心理學に關してはヴントの意見に從つて、兒童心理學といふものは從來存在して居ない、といふ考より出發した樣である。何故に然るかといふに、是迄の所謂兒童心理學なるものは、ブライエン、ボールド、ウイン等が其の研究者の實子なる二三の兒童に就いて實驗したる結果を集めたるに過ぎないし、殊に其の實驗機械も甚だ不完全にして、子供の研究には子供專用のものを要する筈であるのに、矢張り、大人に施すのと同じものを用ひたのである。蓋し幼兒は活動的のものなれば、被驗者として故意に靜止するが如きは到底望み能はぬ所なれば、

之に適用するには特別の實驗機械を要するは勿論の事である。然のみならず兒童の心理學に就いては、單に外部より觀察する所を記錄するに止まり、其の精神內部の眞相に至りては、被驗者の內省に依るにあらざれば、到底知るを得ざる所なれば、研究者は結局之を窺ひ知る事の出來るものでない。故に此の點に於てもヴントの說に從つて、被驗者を愼重に觀察して其の結果を記錄するに止めたのである。尤も兒童心理學に於ては、大に發達といふ觀念が這入つて來るものであるから、成人の心理學とは頗る其の趣を異にするものであるが、此の點に關しても女史は專ら觀察といふ方便に依賴した、と述べてゐる。然れども兒童を研究する際には、絕對無豫想といふ事と獨斷に流れない事とに注意した、と附加へて居る。先づ其の人類學的方面より述べて行かう。

人類學的考察

兒童の物質的(身體的)發達に關しては、主として人類學的方面より、其の最も重要なる點より觀察の步を進めたのである。詳言すれば既に述べたるが如く、人類學的には種々なる方面あれども、其の最も重要なる部分として身長、體重及び兩者の關係、並に頭蓋に關する部分を特に選擇して研究の對象としたのである。

身長の研究及び測定機械の案出

女史は先づ目盛を有する身長測量器を考案した。其の身長器は高さ半メートルより一メートル半の間を上下し、別に三十サンチメートルの高さを有する一小腰掛を、身長機の臺の上に載せて、座せる時の身長をも測るの便に供した。而して此の竿の前後兩側に、目盛を有する腰掛付身長器を作製したならば、更に便利であるといふ事を提言して居る。蓋し之によりて臺の附いてない方にては、全身長を測り、他側にては一兒を座せしめて、上體の高さを測るのである。後の場合には、零は下より三十サンチメートルの所へ記する、そは固定せる腰掛の高さに相當するのである。頂點に於ける二箇の指示機(インディケーター) indicateh は、各々獨立無關係に動く樣になつてゐる。是れ畢竟同時に二兒を測り得るが爲である。これ腰掛を取捨するの不便と、之に要する時間の浪費は消失し、又目盛の差を差引する面倒も省かれるのである。

斯く測量法を容易にしたる後、女史は毎月幼兒の全身長と、上體の高さを測ることに決し、又是等の測量を、幼兒の發達關係と相聯關して、成るべく精密に測定せんが爲に、且又教師の研究上に正確を與へんが爲に、測量を爲すには、幼兒が其の年齢上滿何年何ヶ月といふが如く、其の各の月を完成したる日(例へば五月二十一日生のものは、毎月廿一日を以てその月を完成す)を以てすべき規定を設け、是等の目的を達せんが爲に、下の樣な記錄箋を考案した。

身長調査用箋

日附	九月		十月	
	身長		身長	
	立てる時	座せる時	立てる時	座せる時
1				
2				
3				

體重の測定

等	5	4		

各數字の上方なる空所は、其の月の其の日に生れた兒童の姓名を錄する爲に用ひる。斯くて教師は、何の兒に對して、何の日に測らねばならぬかは、暦に記入したる兒童の姓名を見て、直ちに之を知ることが出來る。即ち教師は毎月各兒童の生れた日に身長を量り、其の結果を記入する。此の方法に從ふ時は、餘り面倒なくして而も最も精確なる記錄を爲し得るのである。

幼兒の體重に關しては、二臺の看貫を浴室に設備し、各兒を毎週一回づつ測らしめた。即ち兒童の生れた曜日に從つて、其の入浴の際に測らしめるのである。斯くて幼兒の入浴は七曜日に配當され、毎日數人づゝ沐浴せしむる。理論的に言へば、毎日の沐浴は確かに結構である。併し之

が爲には大浴場か、若くは數多の小浴場を設備するの必要が生ずる。週浴でさへ種々の困難を惹起して、之を勵行し得ぬことが屢々あるにも拘はらず、女史は之を實行した。兎に角上に述べた樣な順序で、體重の測定を規定したが、是れは定期沐浴を規定し、之を勵行せしめんとするのが主なる目的であつたのである。

次に掲ぐる用箋は、幼兒體重の記入法を示したものである。

人類學的測量は教師自身の行ふべき部分としては、既に述べたる測定法及記入法（身長體重の）を以て充分であるとし、其の餘の測定は現に兒童人類學の專門家たる者、若くはたらんと志す所の醫師に爲さしむる。而して同時に、女史自身も此の特別なる測定に從事したのである。

月曜	火曜	水曜	木曜（等）

醫師の爲すべき檢査は、自然に複雜となるを免れない。而して之を容

九月 第一週	第二週	第三週	第四週

き人類學的調査

易にし又整理する爲に、女史は下に例示するが如き個人調査表を考案して印刷した。

個人調査表

個人調査表

番號
氏名　調査年月日
年齡　齡
兩親の名　母の年齡　父の年齡
職業
遺傳の詳細
幼兒の經歷（何地ニ生レ、何歳何ヶ月何地ニ轉任、何歳何病ニ罹ル等＝譯者ノ註）

人類學的調査表

身長		
重體		
胸圍		
(1) 體上		
(2) 數指長身		
(3) 數指重體		
頭部	周圍	
	(4) 徑直（後前）	
	(5) 徑直（右左）	
	(6) 數示指頭部	

(1) 座したる時の上體の長さ。
(2) 上體の長さを以て全身の長さ（身長）を除したる數。
(3) 身重を以て體重を除したる數。

物質的組織
筋肉ノ狀態
皮膚ノ色
毛髮ノ色
備考

註

(4) 頭の前例へば眉間より頭の後例へば後頭突起貫きたる直線の長さ。
(5) 例へば一耳の上根より他耳の上根に貫きたる線の長さ。
(6) (4)を100とし(5)の長さと比例せしめた數例へば(1)が一尺にして(5)が八寸なる時は100と80との關係になるからして其頭の指示數を80と呼ぶのである。

$$\overset{4}{\alpha}:\overset{4}{1}=\alpha:100$$

$$\therefore \frac{8\times100}{10}=80$$

個人調査表を簡單にしたるは實用的ならしめん爲なり

是等の調査表は頗る簡單である。蓋しそは校醫や教師が自由に獨立的に之を使用し得るが爲特に之を簡單にしたのである。從つて此の方法により、人類學的記述は秩序正しく、記入せられ、同時に其の體制（組織）の簡單と、表簿の清潔とは、容易に女史が根本的とせる觀察を成遂せしむるのである。醫師の個人調査に關しては、毎年一回以下の測定をなし、頭の

周圍、頭の二つの直徑、胸圍、頭部、體重並に身長的諸指數の算定を爲すのである。是等測定の選擇に關する詳細は、女史の著、教育的人類學」を參照されたい。而して女史は、醫者は是等の諸測定を、幼兒が滿年(滿三歳、四歳、五歳等)に達する週の內に、或は少くとも其の月の內に行ふべく、若し能ふべくんば誕生日が最もよい、と言つて居る。此の法に從へば、醫師の仕事は其の規則正しきが爲に、最も容易に行ふことが出來るであらう。女史の學校は全數殆んど五十名にして、而も其の誕生日は三百六十五日の中に散布して居るから、醫師は毎日々々(員數は少いが)體格檢査をする事が出來る。故に其の負擔は決して過重とは言へぬ。而して教師は幼兒の誕生日を必ず報告するの要があるとして、次のように述べてゐる。

『是等人類學的測定其の物が、一種の教育的價値を有して居る。そは幼兒が「兒童の家」を去つた後に於ても、明瞭確實に以下の問に答ふる事が出來るからである。

何曜日に生れたか

何日に生れたか

何時誕生日が來るか

幼兒の自己觀察を促す

斯くて幼兒は秩序の習慣を獲得し、然のみならず、自分自身を觀察する良習を形成するであらう。實際私は茲に揚言する事が出來る。幼兒は是等の檢査を非常に喜び、教師を一見し、「體格」の語を一聞するのみにて幼兒は直ちに其の靴を取り去り、嘻々として走りて身長機の臺上に正しく座し、教師は唯指示器を操縱して其の結果を讀むだけに止まり、其の姿勢を正さしむる等の面倒は更にない位に、子供は檢査に熟練して居る。

醫師は又「カリパース」尺度等の、普通の機械を以て測量をなす傍、幼兒の色(皮膚の)、筋肉狀態、淋巴線や血行狀態を觀察する。醫師は凡ての畸形に注意し、又愼重の態度にて病理的狀態(佝僂病、兒童痲痺病、近視眼等に陷らんとする傾向)を記入する。兒童を斯く觀察的に研究し置く時は、醫者にして若し幼兒の狀態に關して、其の父母と協議するの要ありと感ずる時に、醫者の參考となるのである。

醫師は又上述の檢査に基き、幼兒の家に對し精細なる衞生的檢査を行ひ、是等諸病に、必要なる取扱を說明し、終に濕疹、耳疾、熱病、內科的障碍等を除去する事が出來る。斯かる場合の處分は、長屋の內に存する病院が大に助力することになる。蓋し病院は實際的直接的取扱と、不斷の觀察とを怠らぬからである』と。

女史は嘗て精神病院へ來る患者に、種々なる質問を發した事があるが、是等は「兒童の家」に對しては、適用が出來ない事に氣附いた。何となれば此の長屋に住するものは、大部分普通一般の人間(病的狂的にあらず)だからである。

故に女史は敎師を勵まして、其の母親との面談によりて、一層實用的なる報告を蒐集するに努力せしめた。斯くして敎師は兩親の敎育、習慣、賃銀額、生活費等に關する事項をも熟知し、是等の事實よりして、各家族の歷史を推知する樣にせしめたのである。

勿論斯かる方法は、唯敎師が其の生徒の家族間に居住して居る、といふ場合にのみ實行し得らるるのである。

併しながら兎に角、各個兒童に關する衞生的注意事項、並に一般衞生事項に關する校醫の忠告は、最も有力なるものたる事を證するであらう。然れども母親達は敎師を信ずる事最も深く、又上述の如き忠告を敎師より傳承するは自然(適當、恰好)であるからして、是等の事項を傳達する媒介者は、矢張其の人であると述べて居る。

敎室の設備

抑〻觀察法は、生徒の身體發達を系統的に觀察する事を包含するは勿論である。然れども此の方面が如何に必要なりとはいへ、之のみを以て觀察法が完備したものとはいへない。何となれば一體觀察法は、一ッの根本的基礎の上に建設せられねばならぬからである。即ち兒童の自由を許して、其の自發的表示を盛ならしめ、而して其の自由を爲す中に、敎師は之を觀察するのである。換言すれば敎師は被敎育者を系統的に研究すべきものなれば、上述の人類學的觀察のみにては不充分である、故に此の外兒童の行動を觀察せなければならぬ。之がためには其の境遇を整

理して自由に行動せしめ、以て是等自由行動を觀察すべきである。此の考を以て、女史は先づ注意を境遇問題に傾注し、教室の設備は、境遇問題の重要なるものであるとして居る。此の學校的境遇の重大なるものとして、女史の學校には宏漠なる遊歩場と、一大花園とを有して居るが、單にそれのみにては何も新規とするに足らぬが、此の廣濶なる場所を如何に利用するかといふ點に至つて女史の學校の特色は存する、即ち遊歩場は直接教室と相通じ、幼兒は終日何時でも自由に内外を往來する事が出來るのである。尙此の事に關しては後に詳述しよう。

境遇改良の第一歩―遊歩園

女史の學校に於ける教室施設の重要なる改革は、机、腰掛並に固定椅子を廢し、其の代りに廣い、堅い、六角の脚を有する卓子を備へた事である。卓子は頑丈であると同時に非常に輕い、四才の幼兒が二人にて自由に持運びの出來る程輕い。其の形は矩形にて、長い側には優に二兒を着席せしむべく、若し多少の屈究を忍ばば三人でも併座し得る。此の外一人用の卓子もある。

第二、卓子及腰掛

女史は又小き椅子を考案し、製作した。女史の考では最初の座を籐にする積りであつたが、經驗上それは毀れ易いといふ所より、遂に板椅子とする事に定めた。是れが又甚だ輕くて、其の形も氣持が良い。此の外各教室には數個の安樂椅子があつて、或物は木製、或物は柳枝製である。

第三、手水臺

此の他の設備には小さき手水臺があつて、三才の兒が充分に使用し得る程低くしてある。之は白色の防水エナメル(繪具)にて塗り、其の臺の廣い側には上下二段の棚を設け、棚をも白く塗り、洗盤、水差の類を置き、狹き側にも亦小き棚を設けて石鹼箱、爪取、手拭(タオル)などを置いてある。又洗盤の水を受くる受水器もある、其の他場所の許す限りは小き戸棚を設けて、幼兒自身の石鹼、齒楊子、爪取等を仕舞はせてある。

第四、室内設備特にラファエルの傑作マドンナの額

各教室には幾つかの低い長い戸棚を設けて、主として教具を其の中に始末して置く。固より戸棚の戸の開閉は極めて容易にして、教具の保管は幼兒に一任してある。而して其の戸棚の上には盆栽、養魚盤、或は玩具類を並ぶるだけの餘地を存してあるので、幼兒等は此所をも使用して、自

由に嬉遊する事が出來る。又室内には數枚の黒板をも備へ、最幼兒も自由に之を使用し得る程低くしてある。各黒板には小き白黒箱(色チョークも這入つて居る)と、布(ラーフルに代用す)とが附屬して居る。戸棚の上には精選された、而も注意を惹く樣な繪を掲げてある。書題は簡單にして、自然に幼兒の興味に適するものを選定するのである、尤も羅馬の「兒童の家」に於ては、ラファエルの「マドンナ、デラ、セギオラ」の複寫がかけてある。而して此の繪を「兒童の家」の表徴(エンブレム)として選定したのであるが、特に之を選定した理由に就いて語つて曰く、『兒童の家は實に社會の進歩を代表するのみならず、一般人類の進歩を代表し、且母親の思想を向上せしめ、婦人の進歩と兒孫の保護とを標榜するのである(第三講參照)。此美はしき理想に、ラファエルは單にマドンナ(其手には彼の女自身よりも偉大なる赤子、即ち親よりも偉くなるべき赤子を抱ける)を、神聖なる母として現はしたるのみならず、此の理想的標徴(Symbol)の側に、ラ氏は人類の代表者たるセント、ジョーンの像を添加した。されば我等はラファエルの畫に於て、人類は母親(Matherrity)に服從せるを見る、――母親は、人類の確固たる勝利に於ける壯高なる事實である、此の美はしき標徴主義に加ふるに、此繪　伊太利に於ける最大藝術家の手に成つた、といふ事が大變に結構である。然かも此の兒童の家が全世界の何處にも設立せらるるに至らば、ラ氏の此の繪は何れの學校にも之を掲げられん事を希望する、之に依りて「兒童の家」が創始せられたるは、何國なるかを語り繼がせたいからである。

幼兒は勿論マドンナの標徴的意義を了解する事は出來ない、併し適に幼者の眼にも、單に母と父と兒童とを描きたる普通の繪に對するよりは、何となく一層美なる或物を感得するに相違ない。而して絶えず此の繪に接觸する事によりて、幼兒に宗教心を覺醒せしむる事が出來るであらう』と。蓋しマドンナの額は、高尚なる母親と其の養成したる偉人との像を書けるものにして、母親の思想を向上せしめんが爲の標徴とし、同時に伊太利第一の藝術家ラファエルの作なるに因み、「兒童の家」が伊太利に淵源せる事を、世界に記念せしむるに便利である、といふ所より特に此の繪を

選定したのである。

以上は女史が教育せんとする幼兒の爲に、特に整理したる境遇である。

自由主義と訓育

女史謂へらく、從來の訓育法に慣れたる人々は、「兒童の家」が自由主義を採つて居る事を聞いて、子供は定めしピンシャン駈け廻はる際に、机や椅子を轉覆して、其の結果擾騷に堪えないであらうとの意見を抱く者もあらう。然れども之は一片の偏見に過ぎずして、眞に我が教育的根柢を知らざる者の素人考に過ぎぬと。

初生兒を卷く服裝(軀幹を手足と共に卷く)や、歩き習ひの幼兒に對する歩行椅子(Walking Chairs)は、各國とも必要なものと考へて居る(兩者共に活動を拘束する具)。學校に於てもその如く、一般教育者は机並に床板に固着せしめた椅子が必要であると信じて居る。蓋しこは教育的作用を完成せしめんが爲には、身體に一定の姿勢を與へねばならぬとの理由にて。

然れども女史の學校に於ける小き卓子と、種々なる形の椅子とは、凡て輕くて容易に移動せしめ得る。而して幼兒は各自の最も快適と思ふ所へ之を運びて、座を占むる事を許されてある、されば幼兒は自身を愉快にし、併せて其の好む場所に席を取る事が出來る、畢竟こは外的記號(サイン)たるのみならず、同時に教育の一手段である。女史の意見に從へば、若しも拙劣なる運動をなして、兒童が椅子を轉覆するが如き事あらば、そは彼自身の無能を證明するものにして、之に依りて眼前其の規正力の少い事が證明さるる譯である。之に反して小卓と椅子とが確實に、靜肅に、其の場に留まつて居るならば、そは明かに幼兒が、自己の運動を支配する事の練習が出來た證據である。

從來の教育法に於ては、訓育の完成されたる證左は、上述せる事柄とは反對であつて、單に不動と靜肅とを重んじて居た。併し不動と靜肅とは、優秀嫻雅に行動するの練習を妨ぐるものにして、若しも是等の兒童が、ベンチも椅子も床上に釘付けにされて居ない境遇に身を置いたならば、忽ち輕い器具調度類も轉覆するが如き、粗忽の振舞を演出するであらう。

然るに「兒童の家」に於ける幼兒等は、嫻雅に適當に動作するのみならず、斯くせざるべからざる理由までも承知して居る。女史の生徒は其の幼兒時代に於て、既に正しく動作する事を得、而も完全なる自由を以てするのである。

ミラン（Milan）なる「兒童の家」に於ては、窓の下に長い狹い棚を設け、其の上に教師は小机を載せ、机上には圖案（Design）の初步練習に用る金屬製幾何形體を陳列した。併し棚が狹過ぎるので、幼兒は自分の使用せんとする幾何形體を選取する際に、机の一ッを床上に墜落せしめ、大きな響を以て幾何形體共轉覆する事が屢〻起つた。教師は其の棚を取替へようと欲したが、大工に差支が出來て容易に來なかつたから、其の來るを待つて居る中に、幼兒等は狹い傾いて居る棚であるにも拘はらず、其の上の小卓子を最早や床上に墜落せぬ樣に注意して、其の用具を選定し得るに至つた。

幼兒等は其の動作を愼しむ事に依りて、其の設備の不完全に打勝つたのである。外的物體の單純と不完全とは、屢〻生徒の活動と巧妙とを發達せしむる効驗の存するものにして、此の一事は女史の教育法中不思議なるものの一ッである。

以上述べたる所は平々凡々の事柄にして、何等新奇の事がないと言ふかも知れぬが、それが即ちコロンブスの卵（コロンブスの卵）であると女史は言つて居る。

コロンブスの卵とは何人も知つて居るが如く、氏が新大陸の發見を終り西班牙國王に拜謁仰付けられて、新大陸發見の次第を具さに奏聞したるに、並み居たる官人等は、其の樣な事なら誰にでも出來ると事もなげに言つた。此の時コロンブスは新大陸より携へ歸りたる駝鳥の卵を取出しながら、廷臣等に向つて、此の卵を直立させて見よと言つた。廷臣等は百方試みたれども決して立たない。コロンブスはやをら之を取上げボンと卵の底を打ち缺いて卓上に直立せしめ、「御覽の通り」とすまして居る。廷臣等は之を見て、「そんな事なら誰にでも出來る」と言つた。誰にでも出來る事を誰も成し得ないのが世の常である。爾來此の眞理を言ひ現はすに、「コロンブスの卵」といふ句を用ふる樣になつたのである。

第五講　訓育 (Discipline)

第一緒論　門氏教育法の根本原理

モンテツソリー教育法の根本原理は自由主義である。故に其の訓育論の根柢をなすものも、亦自由主義たるは言を待たない。されば今自由主義の何たるかを一言するは、決して無用の辯でないと信ずる。

自由の二方面　消極的　積極的

自由の意義には消極積極の二つがある、消極的方面は外部的拘束を受けない事であつて、積極的方面はそれ自身の法則に從つて活動する事である。

本書に於て女史は、其の自由論に接觸する事一再ならずであつた。第一章に於て机・腰掛を呪詛したのは、それが兒童の身體を拘束するが爲にして、又同章に賞罰の有害無益なるを極論したのは、其の精神を束縛するが爲である。賞罰は精神に對する机腰掛なりと斷言せるを見ても明かである、要するに腰掛といひ、賞罰といひ、共に被教育者を外部より拘束する點に於て、共に自由主義の敵である。

積極的自由

自由の積極的方面は、自己の見解・慾望・性癖・性質及び衝動に從つて活動する事、即ち創作力を有する事である。獨立獨行、毫も他人の命令等に依りて左右せられない事である、門氏に於ける自由の人とは獨立獨行の人なり、とは本講に於て述べんとする所に詳である。

政治上の自由と教育上の自由とは酷似す

要するに自由とは消極的には外部的拘束を受けず、積極的には自分自身の判斷慾望等に從つて、獨立獨行的に活動する事であるが、政治上に所謂自由も亦、教育上のそれと酷似して居る、即ち消極的には國民の國家に對する關係上、充分なる政治的權力を有し、他人の權利を侵害せざる限り、國家の干渉を受けざる場合に、其の國民は自由なりと言はるるのであつて、積極的には凡ての國民をして悉く其の能力に應じて、各自充分に發展するの機會を得しむるが如き社會狀態の下にあらしむるを以て、國家は國民に對して眞に自由を與へたりと言ふ事が出來る。

政黨と自由　自由黨　急進黨

今政黨政派に關して考へて見るに、自由黨といふのは、保守黨に對するものにして、這は古俗・習慣・制度等を墨守する事なく、進みて是等の改良發

展を企圖する事を喜び、且之を主張するの思想を抱く者の集團をいふのである。若し其の思想が突飛急激の改進變革を喜ぶが如きは、極端なる自由主義卽ち急進黨と呼ばるるのである。

自由に消極・積極の兩面ある事は上に述べたるが如し。而して門氏の所謂自由に於ても、完全に是等の兩面を具備して居る、其の消極的方面に關するものは旣に述べた通りである。其の積極的方面に關するものに至りては、本講以後に於て常に出現する、例へば本講に於て、「自由は獨立なり」と言ふが如きは、其の一例である。殊に此の獨立といふのは、女史の自由主義唯一目的とも言ふべきものにして、有らゆる教育的手段は畢竟之に歸着するといふも過言でない。

女史は其の著述の或所に於て、『自由は活動なり』("Liberty is activity"—"Montessori Method" chap. V P. 86)と言つて、自由と活動とを全然同一視して居る。

自由と活動

兒童は本來活動を愛するものにして、兒童に自由を與ふとは其の活動を拘束する事なく、却つて之を發揮せしむる事を言ふのである。而して其の獨立といひ、工夫創作といひ、或は發明發見といひ、何れも心身の活動ならぬものはない。其の活動に拘束を加ふる事なく、却つて之を奬勵發展せしむるに依り、茲に始めて自由を與へたりといふ事が出來る。自由の消極的といひ、積極的といふも、畢竟するに活動の一語を以て約する事が出來る。"Liberty is activity"の一句、至れり盡せりである。

活動主義と我儘主義自由の制限

活發は兒童の天性である、然れども之には善なるもあれば惡なるもある。是に於てか自由には制限を要する、されば女史も亦之に制限して居る事は、後に說くが如くである。蓋し人性が絕對に善ならずして、人間人格の中心所謂眞我より來るものもあれば、情慾卽ち假我より出づるものもある。然るに活動に些の制限をも加へざるが如きは、情慾を恣にせしむる道理にして、教育の主義に反するものである。自由主義卽ち活動主義は眞我の活動を盛ならしむる事、價値ある活動を奬勵する事である。而して如何なるものが眞我の活動、價値ある活動なるかは大に教師の判

價値ある活動

斷を要する所、多大の技倆を要する所新舊教育者の岐るる點であるが、一言にしていへば獨立的創作的、發明發見的活動にして、而も結果の善なるものが價値ある活動である。徒に教權を以て束縛し、劃一的模倣的活動のみを事とせしむるは、舊式的教師である。尙詳細は本論の進むに從つて明かになるが、此の事は大に教師たるものの考慮を要する點である。

性善を豫想す

尙又女史は、自由主義の根柢として人性の善なるを豫想し、好んで內部生命"inner life"の語を使用して居る、此のものには先天的に萬善具備せるものとし、殆んど孟子の「萬物吾に具はれり」と言へるを想起せしむる程である。此の性善といふ事は、自由主義の根本原理をなすものにして、若し之を否定せば自由主義は到底成立しない。

活動は兒童の天性なれども、混沌不規則なるものが多い。動物の本能運動の如きは最初より整然合目的的にして、人間のそれとは餘程異つて居る。然かもその混沌不則規なるが故に發達は可能なるものにして、動物の運動の如きは、それ以上に發達せしむる事は出來ない。一言にして言へば教育は不可能にして、又不必要である。（拙著「自動主義最新教授論」中自發活動の章參照）

活動と法則

要するに人間の最初の活動は混沌不規則にして、目的に適應しないものが多いのであるから、之を規則立てて行くのが父母教師の任務である。然るに規則を以て拘制する事と、自由を許す事とは明かに矛盾でないかとの疑問の生ずるは自然である。

然れども元來法則といふものは一見人の活動を拘束する樣ではあるが、人が法則を設けるは、果して人間を拘束する爲であらうか、自繩自縛するが爲であらうか、否々法則は大に人的活動を容易ならしむるが爲に設けられたものである、人的活動を自由ならしむる爲に設立されたものに外ならぬ。透視の法則を明めぬものは、平面なる紙上に奧行ある景色を描き現はす事能はず、文法や美辭法を知らぬものには、他人を感動せしむるが如き大文章を草する事は出來ない。否之を知らずして而も大文章を作る人も間々あるけれども、そは長き經驗の結果として自然に之を悟

了したのであつて、之を以て法則の必要を否定する譯には行かぬ、若し早く之を修めたならば、一層速かに自己の思想を發表するの能を養ひ得たかも知れぬ。圍碁を學ぶにしても所謂「ザル碁」とか、「お祭り碁」とかいふ段までは無茶苦茶打ちでも善いが、それ以上に到達せんとせば、何うしても定石を研究せねばならぬ、と聞いて居る。文字にしても姓名を記するに足る程のものは無茶流でもよいが、それ以上には何うしても書法を學ばねばならぬ。余は尋常五六年幷に高等女學校一二年の習字を受持つて居るが、三體の區別、書の法則を八釜しく教へて居る、最初はイヽデケル樣であるけれども、(殊に尋六に於て然り)上級に進むに從つて巧になる。

古人は、何でも一ヶ月熱心に行れば際立ちて上達するが、書方のみは少しも上達が見えない、池の水が黑くなるまで、又禿筆が大なる數個の甕を充たすまで習はねば上達せぬ、と言つて居るが、そは全く虛言である。余の經驗によれば、毎週一時間、而も一學期にて充分成績を擧げる事が出來る。これ書の法則を授くるが爲にして、而も模寫に巧になるのみならず應用即ち如何なる文字にても巧に書き得られる、されば余は尋常五年後より、盛に之が應用を課して居る。

由是觀之則ち書の法則を知るといふ事は、自由に書き得るといふ結果に到達するのである、故に遵法と自由とは、決して矛盾の原理ではない。法則は自由に導く道筋にして、兩者は實に原因結果の關係を有して居る。

此の他法則を遵守する時は萬事が立派に見える、故に女史は、幼兒をして事物を整頓し、若くは列を正して席に着き、又は進行するが如きは立派であるから、之を行ふといふ考を以て、幼兒をして自ら進んで、換言すれば自己の自由なる判斷を以て之を行ふ樣にせしめよ、といつて居る。

之は大に意味ある事にして、徒に法則を以て高壓的に强行するは自由の原理に背いて居る。所謂絕對命令を以て兒童を拘束するが如きは、自由主義ではないのである。勿論年齡にも依る事で、二三歲の子供には必要もあらうが、命令の理由を了解するに至らば、充分に之を說明し、好みて之を行ふ、自己の自由意志によりて之に從ふといふ樣に仕向けねばなら

ぬ。

人或は軍隊に於ては絶對命令が必要であるから、幼兒より之に慣れしめよと言ふかも知れぬ、併し余の考では、所謂軍隊に於ける絶對命令といふのは、其の形式は絶對であるかも知れぬが、其の精神は依然相對的であるといふのである。何となれば上官の命令に對して、其の理由の說明を求むるなくして、絶對に何うあつても服從せよといふのが所謂命令にして、例へば大敵を前に控へながら上官が、「前へ」の號令を下した時、兵士及び下官の者が、大敵前に在り彈丸雨飛の此の場合に、何故前進を敢てするかなどゝ理由の說明を求めて居たならば、味方は忽ち敗北するのである。然り確かに敗北するのである。

然らば軍隊にては何故に、上官には其の理由の說明を求めずして服從すべきかといふに、若し然かせずば味方は敗北するが故である、といふ理由の下に服從するのである。而して此の理由は一兵卒と雖、十二分に之を了知して居る。故に絶對的服從とはいへ、實はさうではないのである、

相對服從

是れ余が形式は絶對服從なれども、實際は相對的なりといふ所以である。

由來戰場に於ては、兵卒や下官は其の大局を大觀する事能はざれば、各自が一己の判斷を以て行動する時は、忽ち味方の敗北を來すのである。故に一に其の大局の大觀をなせる上官の命令を確守するは、味方の勝利を來す唯一の原理である。其の官等の高きもの程大局に通じて居る道理であるから、一階級にても自分より高き長官には、絶對に服從せねばならぬのである。殊に戰陣に於けるが如く、咄嗟の間に事を處せざる可からざる場合には、所謂絶對服從に依るにあらざれば、勝を制する事は到底不可能である、之を以て軍隊に於ける絶對服從は、次の如き形式となる。

汝は味方の敗北を欲せざるべし、故に上官の號令には理由の說明を求むる事なくして服從すべし。

其の前項は服從を求むる理由である、少くとも豫想されたる理由である、隱れたる理由、言外の理由である。故に其の實絶對服從といふ事は出來ない。下官の人格を無視する爲ではない、一兵卒を機械視する譯では

ない。然かのみならず軍隊に於ても、戰場に於て一將校も下士も仆れて仕舞つた場合には、一兵卒と雖自由判斷に依りて處理せねばならぬ場合もあるのであるから、獨立獨行の練習をも豫めして置く必要もある。

斯く觀じ來れば、世に絶對服從といふものは殆んど皆無となる、敎育の如きは戰陣に於けるが如く、一轉瞬の間に運命を決するが如き事業にあらざれば、何も絶對服從的高壓手段を用ふる必要はない、須く理由を說明して兒童の自由意志に訴へ、喜び勇みて服從せしむべきである。萬一一轉瞬の間に其の運命を決するが如き場合(火・震災に避難する場合の如き)ありとせば、所謂絶對服從を要求するも差支ない、否然せざるを得ない、故に豫め其の練習を爲し置く事も敎育の一部である、要するに軍隊に於ては絶對服從を主として獨立獨行を客とし、學校に於ては正に其の反對に出づる者と見れば大差なからう。

大分講義が横道へ這入つたが、要するに法則は自由を束縛するものではない、却つて活動を自由に且容易ならしむるの手段たるものなれば、自由と遵法とは決して矛盾するものではない。而も充分に其の理由を了解せしめ、喜び勇みて自己の本心より之に服從せしむる時は、毫も强迫の性質を有せずして、內心の自由より出でたる服從なりといふに歸するのである。

第二本論　自由に基く訓育法

近時自由主義と我儘主義、放任主義(無規則主義)とを混同するもの無きにあらざれば、比較的多くの詞を費した譯である。然かのみならず以上論じたる所を頭に入れて而してモンテッソリー敎育法を讀むならば、大に其の了解の助けたるべしと信ずるのである。以下女史の訓育意見を述べて見よう。

訓育上に自由を貴ぶ所以は、活動を旺盛にして獨立獨行にまで導かんとするのが主なる目的ではあるが、他方又兒童を自由に動かしめて赤裸裸なる行動を觀察し、以て兒童の心理を探究し、之を以て一は兒童心理學を建設し、他は之を敎育上に應用せんとするのである。されば訓育論の劈頭第一に女史は次の如く言つて居る。

"The pedaggical method of observation has for its base the liberty of the child; and liberty is activity."

（觀察といふ教育的方法は、それの基礎として兒童の自由を有せねばならぬ、而して自由は活動である）

即ち觀察といふ事は教育上重大なる方法の一つであるが、それが爲には兒童を自由に行動せしめねばならぬ……との意味である。而して舊教育法に於ては、訓育とさへいへば兒童を靜肅ならしむるに努めて居たが、新教育法に於ては、訓育は發動的でなくてはならぬ。人爲的に啞の如く靜に、痲痺患者の如く靜ならしむる事が訓育ではない。斯くの如きは其の個人を皆無にしたるものにして、訓育を施したのではない。之に反して訓育されたる個人とは、「自分自身の主となり、又人生の或規則に從ふを要する時には、自己の行爲を整頓して之に服從する底の人」を言ふのである。而して斯かる發動的訓育法は、確かに一大教育的原理を包藏するものである。然れども之が實行は中々困難にして特殊の技術を要し、

自由の制限

殊に兒童をして生涯此の流儀に依りて自己支配を爲すの基礎、即ち訓育の繼續的興味（卒業後一生繼續せんとの趣味）を養成せんとする場合には、尙更に容易ではない。

又兒童をば學校生活の準備を爲さしむるが爲教育するのでなく、社會生活に適する準備を爲さしむるものなれば、自ら檢束して靜座をこれ事とせしむる事なく、活潑潑地、社會協同生活を容易に正確に成遂するが如き練習を爲して、之を習慣とせねばならぬ。

然れども兒童には絶對無限に自由活動を營ましむべきではなく、其の限界としては團體の利害を顧慮するといふ範圍に於て之を許し、其の活動の形式としては、上品嫻雅と考へらるゝものに限らねばならぬ。故に他人を怒らしめ若くは苦しましむるが如きもの、或は粗野なる者、下品なる傾向ある者は斷々乎として之を禁ぜねばならぬ。併し此の要件以外の者は如何なる活動にても之を許容するのみならず、教師は精密に之を觀察せねばならぬ、茲に重大なる點が潜んでゐる。而して教師は是等兒

童の自然的現象を觀察するの能力と、慾望とを有せねばならぬ。されば教師は發動的たるよりも、寧ろ受動的でなくてはならぬ。期待科學的好奇心より成立受動的にして、同時に其の現象(兒童の活動)を尊重するの念に富まねばならぬ。「教師は觀察者なり」との位置を了解するのみならず、之を感知(フィール)せねばならぬ。(眞にさうだと心底より感ずるをいふ)

實際兒童の活動を抑止する事が、如何に大なる弊害を持來すかは測り知れざるものがある。女史曰く、『抑々人類は此の幼年期(tender age)に於て、其の知的光華の形を以て、それ自身(人類それ自身)を發露する者である事は、恰も日輪の黎明に出現し、花の初めて其の瓣を開ける時に於けるが如くである。而して我等は、謹み敬ひて是等個人の最初の表出を尊重(レスペクト)せねばならぬ。若しも一教育法が價値ありと言はんが爲には、此の人生の完全なる顯現を助長(ヘルプ)する傾向を有する者に限るのである。斯くの如く有効ならんが爲には、嚴かに兒童の自發的運動の抑壓と、出鱈目な教育法實施とを避けねばならぬ。併し斯く言へばとて、無益なる又危險なる行動をまで尊重せよといふのではない、斯かる活動の斷乎として抑壓し、破壞すべきは論ずるまでもない事である』と。

教師は受動的

然るに舊式の教師は科學的の素養特に人類學實驗心理學等が無いからして、學理的修養と實際的練習とを積むべきは勿論であるが、新教育を受けた教師でさへ、イザ實行といふ場合には隨分困難を感ずる。『教師は自分の新しい仕事は、明かに受身であるといふ事を了解せぬ。實に教師は宛ら天文學者の如く、世界は無際限なる空間に轉々活動するけれども、自分は望遠鏡の前に靜坐せねばならぬのと同じである。此の「人生はそれ自身活動す」(Life acts of itself)といふ思想と、又此の人生を研究して其の秘奥を發き、以て其の活動を指導せんが爲には先づ人生其の物を觀察し、干渉する事なくして之を了解する事が必要であるといふ思想とは、之を同化し之を實行するは、何人と雖も困難とする所なりと言はねばならぬ』と。

從來教師は、自由なる活動者なりと信ずるが爲に、生徒の活動を

抑止するのを其の任務と考へて居た。斯く兒童の活動殊に新入生などは、其の活動の如何を觀察して、其の個性を知るの必要あるものなれば、入學當時の亂雜不秩序は、特に重要なる一大教科書であるにも拘はらず、新來の教師は更に此の點に心付かずして、最初より秩序と靜肅との維持に腐心する。現に某「兒童の家」の開校當日に於て、教師は無理に幼兒を制せんとする。女史が之を禁ずれば、彼はさも心配げに來賓の間を來往して、自己の無罪を辯護するものの如くであつた。而して結局教師は觀察の外何も爲すべからざる事を强ひた時、此の教師は「そんな位なら辭職する方が增しだ」と言つた。

兎に角教師は兒童を觀察して、如何なる行爲は抑止すべく、如何なるは觀察すべきものなるかの區別が出來れば可いと言ひ聞かせる時は、教師の職は無氣力にして恥づべき者なりと考ふれども、一朝科學的素養と實驗の經驗を積むに從ひ、幼兒の生命を開拓する不可思議力と、之に對する興味とを深めるのである。

然るに一般舊式の教師は、如何に觀察と教育の機會とを逸するかを慨歎し、ノタリー氏の諷刺小說「我が富める叔父」(My Millionaire Uncle) を引用して、觀察の忽にすべからざることを引用して居る。今その小說の大意を摘要して見ると、フーフー (Fufu) といふ子供は非常に亂暴者であるから、殆んど學校の寄宿舍へ幽閉して、嚴に監督して貰ふ事にした。彼は此に初めて親切がして見たいと感じた心機一轉。或時フーフェット (Fufette) といふ少女が、辨當を忘れて飢に困んで居る樣子を見たので、フーフーは少女の側に近づき、一語をだに發するなくして自分の小き辨當をフーフェットの膝の上に置き、少女の側より走り去つて吾知らず泣き出した。何故に泣くのかは自分自身にも分らぬ、併しながら彼は生來初めて親切の涙を其の眼に浮べたるを知り、又何にも食べるものなき人の側にて、自分のみ食するのは恥づべき事なりとの念が起つた。彼の涕泣を見て少女は之を慰めたが、其の顏には熱心あり、其の擧動は溫和にして、而も凛然たる所がある。其の時は少女は彼に接吻し、フーフー亦接吻をかへして後

涙を拭つた。

『鋭い聲は庭の彼方より呼びかけた。

「二人はそこに居たの――急いでおいでなさい、そして二人とも內へ歸りなさい」。

是れは先生であつた、敎師は此の惡戯ッ子の心靈中に萠し初めたる最初の萠芽を摧折した。二人の子供が喧嘩でも始めた時と同樣に、盲目的殘忍を以て、此の貴き萠芽を挫いたのである。

「今は校內へ歸るべき時刻となつた、規則は守らねばならぬ」……』

と。

斯くの如く我が敎師達は、「兒童の家」に於て敎育法の實習を爲す際に、最初の數日は、大抵上述の如き敎師と同樣に振舞ふたのである。彼等は殆んど無意識的に幼兒を不動にまで呼び返し、少しも兒童の現はす運動を觀察もしなければ、又何等の辨別をも爲さぬ。例へば玆に一少女ありて、其の身邊に數多の學友を呼び集め、是等聽衆の眞中にて少女は手眞似を

以て說敎を始めるとせよ、之を見たる敎師は直ちに其の側に駈け寄り、其の腕を取り、而して靜かにすべく訓諭する。然かしながら私は、其の兒を觀察しながら、少女は他兒に對して母たり、若くは敎師たるの態度を以て遊戯して居ることを認めた。即ち彼女は朝の祈り、聖者に對する祈願、十字章などを其の學友に敎示して居る、即ち少女は旣に敎師たるの堪能を發露して居るのである。

又他の一兒は常に系統なき亂行不目的の行動をなすので、異常兒と目されて居たが、或日非常な注意を面に表はして卓子を動かし始めた。數多敎師はバラ〳〵と其の子の側に集まり、そんな喧噪をしないで靜かに立たしめんとする。之は此の子にとりては調節的又有目的的なる行動を始めて示したものであるから、此の子の爲には實に尊重に價する行爲であつたのである(卓子を形付けるといふ有目的の行爲)。其の後此の子供は、或小き物を動がしたり、それを机上に整理したりする際に、靜肅に且樂しんで之を行ひ、他兒と些も異る所がなかつた(最初は異常兒と見做さ

其三

れたるに)。

教師が幼兒の使つた種々なる教具を箱に仕末する時に、一兒は師の側に寄り添ひ、教具を取り上げながら、明かに其の師に模倣せんとする欲望を有して居る。

教師は此の時下の如き注意を與へて其の子を自席に送り返さうとする。

『打つちやつておきなさい。お席へかへりなさい。』

併しながら、此の動作によりて何か役に立つことを演出せんとするのであつて、時(タイム)は彼女と共に秩序の教課に向つて熟するのである(月日を經るに從ひ此の兒は秩序の德を養成するのである)。(The time with her, was ripe for a lesson in order.)

其四

或日子供等は笑ひながら語りつつ、浮玩具の浮んで居る水鉢の周圍に集まつた。當時我が校には二歲半の男兒が一人居たが、此の子は一人圓陣の外に取り殘された。而して好奇心を以て充たされて居るといふ事は察するに難くない。私は遠方から非常な興味を以て此の兒を注意して居た。最初は他の兒の側に近づいて列の中へ割り込まうとしたが、悲しい事には力が足らぬ。其處で急度周圍を見廻はしながら突立つて居る、其の小さき面上に於ける思想の表出は、非常に興味がある。私は其の表情を撮影せんが爲に寫眞機を欲しい位であつた。兒の目は小さき椅子の上に輝いた。きつと之を列の後に運んで其の上に上らうと決心したらしい。彼は椅子の方へ歩を近づけ始めた、其の顏は希望を以て輝いて居る。其の瞬間に教師は慘酷(教師自らは靜かにいふであらうが)にも抱き上げて、衆兒の頭上から其の水鉢を見せしめた。『イラッシャイ、可愛相にあなたも見たいでせう』。

疑もなく此の兒は浮玩具を見ても、自分の力で障碍に打ち勝つ事によりて、特に感ぜんとする愉快を經驗することが出來なかつた。是等の玩具を見た所で其の得る所は更にない。然るに其の知力的努力は其の內部的精力を發展せしめたであらう。此の場合に於ては、教師は自己教育

をせんとする此の兒の活動を妨げ、其の代償として何物をも與へなかつたのである。此の子供は特に彼自身勝利者たるを感知せんとしたる一刹那、二つの手に幽閉されて、無力の人となり終つたのである。愉快な、懸念せる、希望ある表情、斯くも私に興味あらしめた是等の表情は、其の顏面より消滅して、他人が彼の爲に働いて呉れるといふ依賴心の表現なる鈍い表情に變じて仕舞つた。

教師は又其の觀察に倦怠した時には、兒童を放任して仕たい三昧の事をさせる。卓子の上に上る兒があう、鼻の孔に指を入るる兒があつても、少しも干渉し矯正しようとはせぬ。或者は又其の學友を突き倒し、或は其の面上に激烈なる表情の曙光が認めらるるもある。然るに教師は少しの注意をも拂はうとはせぬ。

斯かる際に私は、是等行爲を禁遏するに足る程の絶對嚴格を以て干渉せざるを得ぬ樣になる。斯くして次第々々に我等の爲すまじき事は凡て之を禁遏し、之によりて兒童をして明かに善惡の別を甄別せしめんとするのである。

若しも訓育を繼續せしめんと欲するならば、其の基礎は斯かる方法に於て据ゑられねばならぬ。而して入學の當初に於ては、教師等にとりて最も困難である。又幼兒等が發動的に訓練せられんが爲に先づ獲得しなければならぬ思想は、善と惡との區別である。而して教師の事業は、兒童をして善と不動と、惡と活動とを混同せしめない樣にすることである。然かも此の事たる舊式の訓育法に於ては、決して珍らしくない事である。而して是等のことは、吾等の目的は活動に對し、作業に對し、善に對して訓練せしめんとするのであつて、不動的に、受動的に、壓服的に訓育せぬ樣に心掛くるが爲である。

要するに兒童は絶えて粗野亂暴に振舞ふ事なくして、必要的に、知識的に、主意的に動作するが如き教室は、私にとりては眞に完全に訓練された教室と見えるのである』と。

以上專ら個人の訓育に就いて述べたが、女史は以下團體訓育に就いて

述べて居る。例へば全級を一團として、秩序正しく靜座せし、むるが如きは團體訓育の出發點にして、之が養成法に關しては既に述べたるが如く、斯くする事が善美の所業、快樂なる排列なる事を充分會得せしめ、其の實行を强迫する事なく好みて從はしむる樣にする事が自由だと說いて居る。而して斯くするのは合奏・講義に臨める場合の如く、社會的生活を營む上に必要なるものなれば、其の習慣を養成せねばならぬと言つて居る。

活動と善惡との甄別

幼兒が旣に團體的思想を了解し、端座靜肅を要すべき時にも猶起立し、談話するが如き事あらば、そは其の必要あり若くは然かせん事を欲するが爲に之を爲すのである。詳言すれば靜平秩序貴ぶべき事を熟知して居るけれども、而も猶有意的活動を營まんが爲に起立し、離席するものにして、其の際禁ぜられたる事を犯すものもあり、又は爲して善い事を行ふ者もあるであらう。要するに團體的規律に從つて行動を愼まねばならぬ場合に、隨意的活動を爲すのは絕對に善い事ではないが、而も其の場合の如何、行爲其の物の性質如何に依りて、善惡の別は定まるものなれば、是れ亦善惡を甄別すべき新衝動を幼兒に供するものである。

（註）不秩序の行爲より秩序ある行動へ遷移する過程を觀察すべし

團體的訓練に關する研究は、一先づ以上にて一段落を終り、以下再び個人的訓育に關して論述し、亂雜・不秩序・無目的なる行動より秩序あり目的ある行爲に遷移する過程及び方法は、教師に對しては立派なる教科書にして、教育者たらんとする者は多大の注意を以て讀破すべきである。蓋し不秩序なるより秩序あるものへ移る際には、自分自分の有する數多の諸性向（Tendencies）中より、自己に最も會心せる性向を選ぶものであるから、其所に兒童の個性は發揮せらるるのである（個性觀察の便あり）。而して是等の選定せられ、發揮せられて、次第に顯著になれる諸性向も、其の初めは混沌として兒童の運動の無意識、不秩序の中に混在して居たものである。斯くの如くして各兒各樣の個人的差異の顯前するのは著しい現象である。若しも此の方法に依りて兒童研究の步を進むるならば、兒童は教師に對して自由に彼自身の眞相、個性を發露するものである。例へば數多幼兒の中には、一方茫漠睡れるが如く靜かにして其の席より動か

ぬ者もありて、積極的に其の個性を發露せぬ者もないではないが、多くのものは或は他兒と鬪爭喧嘩し、若くは種々なる恩物玩具を轉覆せんが爲に起つ者あり、或は自己の決定したる一定の動作、例へば或場所に運びて其の上に座し、若くは使用せられざる卓子を引寄せて其の上に自己の使用せんとする玩具を、排列するが如き動作を果さんが爲に起つ者もある。

兒童は緩急を常とする

一體幼兒は何をさせても愚圖々々した無能力なる者であつて、例へば着物を着るのでも、顏を洗ふのでも、成人ならば瞬間に辨じ去る事でも、幼兒は數時間を要するのが常である、故に大人は堪りかねて束縛干渉する。

然るに自由主義の教育法は、幼兒を助けて其の障碍に打勝たしむるが如くに仕向けねばならぬ。成るべく早く、且巧みに事を處理し得る樣に指導し、以て他人の干渉より免るる樣にせしめねばならぬ。斯くて一歩一歩幼兒が自ら事を處する樣になる時は、其の自發的行動は益〻明瞭となりて、各自の個性を明確に表示するのである。されば教育の第一歩は、幼兒を導きて獨立獨行の理想に近づかしむる事である。

獨立—自由主義の究竟目的

何人と雖獨立するにあらざれば自由はない、されば幼兒の活動を指導して、獨立獨行の域に達せしめねばならぬ。而して赤兒は、其の離乳期に達する頃より次第に獨立に近づくのである。

離乳期の嬰兒は其の母の胸より獨立して、乳汁といふ唯一の滋養物の代りに麵麭・菓子・果物・ソップ等種々なる食物を攝取し得るのである。今や生存の手段は倍蓰せられて、或度迄は食物の選擇を爲し能ふの自由を有するに至つたのである。

然も此期の嬰兒は猶歩行し、自ら身體を洗ひ衣服を着脱する事も出來ず、言語も不完全にして其の欲するものを要求すること能はざれば、矢張り他人に依賴せねばならぬので、猶凡ての人に對して奴隷である。併し十三歳にもなれば、幼兒は大に獨立自由を獲得する。然るに現今我等が、未だ自由といふ最高概念を徹底的に消化する事の出來ないのは、我等の住する社會的形式が依然奴隷狀態に在るが爲である。實に僕婢の存するが如き文明の程度に於ては、自由といふが如き生活の形式に達する事

が出來ない。況んや奴隷使用の時代に於ては自由の概念は曲解せられ、甄滅せられて居たのである。

『抑〻吾等の僕婢は吾等の從屬者ではなくて、吾等こそ却つて彼等僕婢の隷屬者である。

斯かる制度(僕婢使用の制度)は、社會の道德的頽廢を誘致するものである。

吾等は屢〻單に何物の命令をも受けざるが故に、吾等は自由なりと誤認する、併しながら僕婢を呼びて自己を助けしむる貴人は、實は自己の無力なるが爲に僕婢に從屬し、依賴するのである。其の病の故に自分の長靴を脱する事の出來ない痲痺患者、並に社會的事情の爲に手づから脱靴を敢てし得ぬ貴公子とは、實は同一の狀態に陷つたものである。

僕婢使役の思想を承認し、且他人に奉仕せらるゝは人間に取りて便利なるを信ずる國民は、僕婢制度を一種の本能として容易に柔順なる奉仕を喜び、禮儀、鄭重、仁惠等の美名を其の間に與ふるけれども、他人に奉仕せらるゝ者は、其の獨立を制限せらるゝのである。此の獨立の概念こそ將來に於ける人間的威嚴の根源である。曰く「余は無能力にあらざれば奉仕せらるゝを願はない」と、實に此の觀念を獲得するにあらざれば、眞に自由を感ずる事は出來ない。

子供を傀儡視すべからず

如何なる教育的動作も、苟もそれが幼兒の訓練上に効果あるものたらしめんとせば、兒童を助けて獨立の道途を辿らしむる樣努めねばならぬ。吾等は彼を助けて輔助なくして歩み、駈けり、階段を上下し、落ちたるを拾ひ、衣服を着脱し、自ら沐浴し、明かに語りて其の要求する所を明かに發表せしめねばならぬ。幼兒をして自ら自己の願望を滿足せしめねばならぬ。

我等は常に子供の世話をし過ぎるが、是れは甚だ危險である。何となれば、之に依りて兒童の必要なる自發的活動を抑壓するからである。

斯くて我等は、子供は傀儡の如きものと妄信し、之に沐浴せしめ之に食はしめて、宛ら人形扱にするのである。然るに我等は「何事をも自ら爲さ

ぬ兒は、その之を爲すの道を知らぬ」（The child who does not do, doe not know how to to）といふ事を考へざらんとして能はざる所である。兎に角子供は、是等の事を自らせねばならぬ。而して自然は是等種々の活動を營むべき體力と、如何にすべきかを學習する丈の知力とを附與した。成人の子供に對する義務は、凡ての物を兒童自身に成遂せしめ、以て天意に適ふ樣にすれば良いのである。

されば母親にして其の子に食を食はしめ、自ら匙を以て食物を口に運ぶべき方法を教へず、或は少くとも子供の面前にて自ら食事し、以て其の方法を教ふる事すら爲さぬ者は、決して良い母親ではない。彼女は、其の子の人間としての尊嚴を破るものである。――彼の女は、其の子は實際天より其の教育を委托されたものであるのに、全く之を人形扱にするのである。

其の子をして自ら食事し、沐浴し、衣服を着くる方法を教ふるは非常な忍耐を要する業にして、食はしめ、洗つてやり、着せてやるよりは遙かに難事たるを何人も知つて居る。併しながら前者は教育者の業にして、後者は婢僕の業である。斯くして子供は其の發達の途を閉され、方に發展せんとする人生の行路に障碍を置かるる道理であつて、不幸此の上もない事といはねばならぬ。

斯かる態度の終局的結果は、實に寒心すべきものがある。蓋し過多の從者を有する大貴族は、絶えず其の臣妾に依賴して遂には彼等の奴隷となり了るのみならず、其の筋肉は安逸を貪るが爲に衰弱し、遂には動作すべき自然の能力を喪失するのである。而して自分の用向をも辨ぜずして悉く他人に命ずるが如き人の心は、日增に愚鈍懶惰に陷るのであるが、斯くの如き人にして一旦其の非を悟り、自ら賤劣無能を悔ひ、其の獨立を恢復せんとしても、最早之に適せぬものあるを發見するであらう。上流社會の父母たるものは、其の子女をして彼等自身の特有せる力を獨立的に又正善の事柄に用ひしめんとならば、上述の危險に留意して大に警戒を加ふべきである。要するに不必要なる輔助は明かに自然的勢力の發

婦人の依頼（非獨立的）

展を害するものである。

東洋の婦人がズボンを着て居るのは事實である。而して歐洲婦人は袴下（ペチコート）を着けて居る。併し前者は後者よりも更に甚だしく、其の教育の一部分として成るべく動かない樣にする技術を教へられてある。婦人の此の態度は、男子をして自分自身の爲に働くのみならず、婦人の分まで働かねばならぬ樣にする。斯くて婦人は其の自然的勢力と活動とを浪費し、萎靡奴隷の狀態に陷らねばならぬ。彼女は單に他より維持せられ奉仕せらるゝのみならず、人間として其の生得の權利なる個人性を縮少せらるゝのである。此に至つて、社會の一員として婦人は實に無價値といはねばならぬ。彼女は自己を保護すべき實力と方法とを減退せしめらるゝ。今之を例へば

父母と子供とを載せたる一馬車が、田舍道に沿ふて進んで行く。武裝せる盜賊は、例の文句『金を渡すか命を渡すか』を以て車を遮る。此の危急存亡の際、車中三人の擧動は各、違つて居る。

他人に依頼するものは短慮に陷る

主人は訓練ある射手にして、短銃をも携へて居るから直ちに身構へして賊に抗し、子供は自由にして輕快なる兩足を武器とし、叫んで逸早く逃れ、婦人は人爲的にも自然的にも全然何等の武裝をもなさざるが故に（其の手足は訓練されず、其の裳（モスリン）は身を纏ふが故に）恐怖の太息を洩しながら我知らず其の場へ伏し沈む。

是等三種の相異れる反動は、此の三人の自由と獨立に大關係を有して居る。此の悶絶したる婦人は居常、用意周到なる騎士によりて其の上衣を支へられ、落物は直ちに拾ひ上げられて、自ら曾て身を勞した事のない人である』と。更に進みて女史は他人に奉仕せらるゝものは、其の生命を消燼して無能力に陷るのみならず、短慮の性を養成して、怒り易くなるといふ事を例をあげて說明してある。『例へば玆に大工の棟梁があつて、壹間工場に在りては自己の長所を發揮し、且部下のものを指導し得るが故に、大に得意を感じて居るけれども、此の堪能なる棟梁も、家庭に於てはストーブの味が良くないとか、定刻に食事が支度されないとか言つて、其の妻

女を熱罵するは珍らしくない。家に於ける彼は最早や技倆ある職工ではなく、技倆ある職工は却つて其の妻君にして、彼に奉仕し、彼の爲に食事を調理するのである。此の職工は其の敏腕に依りて勢力を占むる所では溫良快濶の人であるが、他より奉仕せらるゝ所に於ては暴君である。若しも彼がスープの製法を辨へて居たならば、眞に完璧の人たる事が出來よう。要するに其の人自身の努力に依りて自分の享樂と、人生の發展に必要なる凡ての行爲を成遂する事の出來る人は、己に克ち、之に依りて其の能力を倍蓰し、個人としての自己を完成するものである。

吾等は、未來の小國民をして力ある人（Powerful men）たらしめねばならぬ。而して力ある人とは、獨立自由の人である』と。

其の論ずる所は眞に結構である、併し僕婢を使用するが如きは、必ずしも不都合ではない。凡て世の中は分業でなくてはならぬ、主人主婦でなくては出來ない事があり、僕婢で間に合ふ事もある。例へば一家の經濟や幼兒の敎育の如きは、主婦でなくては出來ぬが、洗濯や走り使は下女にも出來る。故に簡易の業は下女等に爲させ、重要の業は主婦自身が爲すべきである。然るに世には主人主婦が安逸を貪らんが爲に、僕婢を使役する者が多いのであるから、斯くの如きは女史と共に大に之を排斥せねばならぬ。

一度自由の原理を承認し確立する以上は、賞罰の如き外部的形式を撤廢すべきは必然の結果である。蓋し自由の原理に依りて訓練せられた人は、既に論じたる如く外部より人を拘束するが如き賞罰を望まずして、眞正唯一の賞を望むものである。此の物たるや決して其の之を受くる所個人を陋劣ならしめ、若くは失望せしむるが如きものではない。果して然らば其の眞正唯一の賞とは何ぞやと問はゞ、實力の獲得と內部生命とがそれであつて、之に依りて其の受賞者の活力は湧起するのであるといつて居る。今之を詳解して見れば、人が善を行ひ、之が爲に物質的の賞品を與へらるゝが如きは外部的のものにして、若し之を受けんが爲に自己の中心望ましからぬ事をも敢てするが如き事あらば、自由の選擇に

依りて事を行つたのではなく、外部より拘束されて、止むを得ず不本意に之を行ふものである。然るに自由主義の人は自己の會心する所を行ひ、之が爲に其の從事する所に熟達(實力獲得)して、其の人の內部生命即ち自我の發展するといふ良果を贏ち得るのであつて、其の良果其の物が賞である。自我發展其の物が賞である。而して其の物たるや、人間を陋劣にする等の憂なきものなりとの意味である。女史は「兒童の家」に於ける實例を擧げて之を立證して居る。即ち「兒童の家」の開校當初の數ヶ月間は、女史一流の新教育法を習つた教師でも、充分に自由主義の訓育を施す事が出來ないで、女史が直接監督して居ない時などには、折々小刀細工を行つて賞罰を行ふ事がある。

或日女史は突然某「兒童の家」に登校したるに、校中第一の利根な幼兒は大きな銀製の希臘十字章に、美しきリボンを附けたのを首より下げて居る。然るに他の一兒は態とらしく室の中央におかれた肘掛椅子の上に坐らせてある。前者は賞せられ、後者は處罰せられたのである。教師は少くとも女史の居る間は何等の干涉をも爲さなかつた、一般の樣子も平素と異らない。女史は平靜を保ち、靜かに觀察し能ふ所へ身を置いた、當時の模樣を女史の詞通りに述べて見よう。

『十字章を佩びた子供は、自分の使つて居た恩物を教卓に返付し、更に他の者を自己の卓上へ持ち來りつゝ、教卓と自席との間を往きつ歸りつして居る。彼は多忙多福である。其の來返の途中に於て彼は處罰兒の傍を經過した。十字章は首より外れて床上に落ちたが、處罰兒は透かさず之を拾ひ上げて、白いリボンを宙に吊るしながら表裏左右よりト見カウ見しつゝ斯ういつた。「君、何か落さないか?」。兒童を顧みて冷然銀章を見たが、其の面上には「大きなお世話だ」といひたげの表情が見えたが、頓て言ふ樣「そんなものはどうでもよい」。「ホントに何うでもよい?、ぢやあ僕かけてもいゝかね」と罰兒は靜かにいつた。前の兒も「いゝとも」といつて尙次の樣に附け加へたさうであつた。「うるさいねえ、邪魔しちやいけないよ」と。

肘掛椅子なる子供は注意して「リボン」を調節し、十字章をば正に其の石竹色の前掛の前に掛らしめ、其光澤と其の美形とに見とれながら、椅子の上に更に安樂なる姿勢を取りて身を定め、さも嬉しげに椅子の縁に其の手を休めた。事實は斯くの如しで而もそは有理(モットモ)である。ダラリと下つた十字章は罰せらるる樣な子供には滿足を與ふるけれども、作業其物に滿足し幸福を感ずるが如き活發なる兒童を喜ばすには足りないのである。

或日私は一貴婦人と同伴して他の「兒童の家」を訪ふた。婦人は口を極めて幼兒を賞讃しながら、携へ來りし箱を開いてッヤ〳〵した赤いリボンの附いた奇麗な「メタル」の澤山を兒童等に示して、先生は皆さんの內で一番上手に、又一番大人しい方の胸の上に此の賞牌を掛けて下さるでせう」と言つた。

私は此の訪問者に、私の教育法を說明せねばならぬといふ義務を有せぬからして無言で居ると、教師は其の箱を受取つた其の瞬間に、四才なる最俊秀なる一男兒は大人しく一小卓子に着いて居たが、明かに反抗の態度を示して額を顰めながら反復絕叫した。

『男の子は要りません、……デモ男の子は要りません』

何たる表示であらう。此の兒は旣に自分が全級中最善最秀者の一人たるを知つて居て(何人も此の事實を此の兒に話した事はないのであるが)此の賞品によりて汚さるるを欲しない。併し如何にして自己の尊嚴を維持すべきかを知らないので、彼の男性の卓越なる性質に其の活路を開いたのである。(男子は要らぬといつた所以)

罰に關しては些つとも訓戒に從はないで、他兒の妨害を爲す兒が屢〻現はれて來る。斯かる子供は直ちに醫者に診察させる。それが病的の兒でない時には室の一隅に小さな卓子を置いて離隔し、氣持の良い小さな肘掛椅子に凭らせ、學友の甲斐々々しく働いて居る狀況が良く見える位置におき、且其の兒の最も好む玩具を與へる。此の離隔は十中八九は其の心を平靜ならしむる効がある。其の場所よりして學友の全般を見

渡すことが出來又其の働き振りも見えるので所謂者にとりてはそれが實物教授（オブジェクトレッスン）となり、教師の千言萬語よりも遙に効果がある。次第々々に己も亦眼前に甲斐々々しく働いて居る兒等と一ッになつて活動したり、席にかへりて學友と同樣のことをさせて呉れと願ふ樣になる。我等は斯かる方法にて最初は訓練に反抗した樣な兒童を、再び正道に返すのである。又離隔された兒童に對しては宛ら病人でもあるかの如く特に厚遇する。先づ私自身が室に入る時は何を措いても第一に其の兒の傍に行き、宛然赤兒であるかの如くに其の頭を擦（サス）つてやる。其の後私は一般の幼兒に注意を向け、深く自ら其の作業に興味を抱きながら小さき成人に向ふが如き態度を以て、種々なる發問をする。私は處罰者が如何に感ずるかは知らないが、完全に永續的に改心するのは確かであつて、被罰兒は其後如何に作業すべきか、如何に振舞ふべきかを了解することを非常に得意とし、教師なり私なりに對して少なからず愛慕の念を表はすのである』と。

訓育論の最後に於て、女史は欄外記載の如き題目の下に生物學的根據

教育上に於ける自由の生物學的概念

を論じて居る。先づ其の大意を述べて見れば、生物學上より所謂自由は、心身全部の發達に好適なる條件を與ふるを必要とする。而して腦は一面生理的而も極めて微妙なる生理的組織にして、同時に精神の宿る所なれば、之を發達せしむる時は自ら心身の全部を發達せしむる事になる。

併しながら人の人たる所以は身體よりも其の精神的方面であるからして、此の方面を重視せねばならぬ。而して人間は十人十色の個別的存在なれば、其の精神的方面の發達に於ても劃一平等的なる可からずして、個別的でなくてはならぬ。

次に人間の心身發達に影響を及ぼすものは、境遇であるか或は內部生命即ち人間の先天素質たる心的萌芽なるかに就いて、後者の更に重んずべきを說き、近時生物學上に於てもネグリードフリースの如きは、大に內的要素の重んずべきを說いたのは卓見なりとして居る。

即ちネグリーは植物に就いて種々實驗の結果氣候土地其の他の變化は植物を變じ得るものであるが、是等の變化は其の植物一代に限るもの

で、次第に遺傳するものではないと說いて居る。更に動物の例にて言へば、家鷄の卵は母鷄が溫めても孵化器に依るも、同じく鷄となる(境遇の爲に變化されず)のである。又家鷄と家鴨とは大に相違して居るが、卵には差したる相違がない。而も孵化して後大なる差異を呈するは、家鷄と家鴨との形質は皆其のアンラーゲ(Anlage)即ち素質、又は天賦性として豫め卵の中に潜在して居るからである。詳言すれば卵內に Anlage plasm 又は Idio plasm 即ち遺傳質として潜在して居るからであつて、外圍の變動等に因つて變ずるものでないと見るの說である。

又ド・ブリー(Hugo de Vries)の激變說(Mutations Thoorie)といふのは、次の如くである。氏は月見草の一種なるラマキアーナ(Lamackiana)が變種して、短き柱頭を有するブレビスチリス(O. brevistylis)或は葉の滑らかなるリービフォリア(O. laevifolia)其の他種々のものとなつたのを發見した。而も是等は何れも突如として出來たものであつて、其の一度現はれたる後は善く其の形質を遺傳するものであると主張し、更に進みてダーウインの唱ふるペリエーション(Varietoion)即ち變化は主として生活狀態等、外圍の刺激より來るものにして、是等は一代限りのものである。故に遺傳性を有する變化は皆ムタチオン(Mutation)即ち激變より來るものであると結論して居る。而してモンテッソリー女史は非常に此の說を歡迎し、此のムタチオンを惹起するものは生物自身の內部生命にして、境遇等の外部より起るものでないと解釋して居る。

併しながらネゲリーのイディオプラズム說にせよ、ド・フリーの激變說にせよ。何れも重大なる、又殆んど致命的の反對說があつて、決して定說といふ譯でない。只門氏が自己の唯心論的色彩を帶べる人生觀を立證する必要あるが故に、其の聲を大にして贊意を表したのである。

以上の說明を頭に入れて、次に述ぶる女史自身の詞を讀むならば、大に了解の助たるべしと信ずる。

自由は心身全部の發達に適する條件を與ふ

『生物學的立脚地より見れば、最幼兒の敎育上に於ける自由の概念は、其の全個人の發達に最も適當なる條件を要求するものと解せねばならぬ。

身體よりは精神が必要

即ち生理的並に心理的方面より腦の自由なる發達を包含するものである。詳言すれば生物學上より所謂自由の意義は、被教育者の心身全部を發達せしむるに好適なる條件を與ふるの意味にて、腦髓を滯りなく發達せしむれば、自ら心身は發達するのであるから、自由を與ふとは畢竟腦の發達を自由ならしむる樣な條件を完備すべしといふ意である。とは言ふものの教育者は、人間の內部に潛む生命を崇拜し、其の發育に深き感興を有する者でなくてはならぬ、詳言すれば其の生命を崇拜し、人間的興味を以て兒童を觀察する間にも、兒童生命の發展を尊重せねばならぬ。更に詳言すれば、只物質的に腦の發達に適當なる條件を具備するのみならず、心理的に兒童內部の生命を尊重するは、其の自由を尊重する所以の更に大なるものである。

而して兒童の生命は抽象的(萬人同一)のものではなくて、一個々々の兒童の生命である。即ち各人特色を有する生命である。尤も玆に所謂生命は「いのち」の意にあらずして、人間の內部に潛める心靈の義である。

境遇よりも心靈が重要

世に唯一眞正の生物學的顯現が存する、そは生きたる個人(抽象的にいふ個人は生きたるものでなく、又眞乎の實在でもない。單に論理的概念に過ぎない)であつて、教育は一人々々觀察して個別的に施さねばならぬ、教育とは兒童生命の正常(ノルマル)なる擴張を發達的に助長するの謂である。蓋し幼兒は成長すべき身長と、發達すべき心靈とを有して居る——此の物質的精神的なる二ッの形式は、兩者に共通なる唯一永久の根源、即ち生命其の物を有して居る。吾等は發達の此の二形式(心身)の奧に橫はれる、秘密なる力(生命)を損害し抑壓する事をせず、只管續々繼起する內部生命の顯現(Manifestation)を靜かに待たねばならぬ。

斯く人間最重の要素は內部生命にして、外的境遇の如きは生命の現象に於ては、第二次的副次的のものである。境遇は生命の發達を或は助長し、或は妨害する事によりて、生命を變化(モディファイ)せしむる事は出來るが、決して之を創造する事は出來ない。

近時ネゲリー、ド・フリー等の進化論者は、生物の二大部門たる動物、植物

界の發達を貫きて、此の內部的要素を種々の變化、幷に個體の重要勢力と考へて居る。即ち發達の根源は種に於ても個體に於ても、其の物自身の中部に潛在して居るのである。されば幼兒は滋養分が與へられ、或は呼吸し、若くは適當なる溫度の下に置かるるが故に成長するのではない。兒童の成長するのは其の內部に潛みて、徐々に開展すべき生命即ちpotential life）の存するありて、それを顯著に發達せしむるが故である。生命の根源たる瑞々しき萠芽が、遺傳に依りて定められたる生物學的運命に從つて發達するからである。青年期は其の兒童期に於て笑ひ、踊り、遊戲し、美食するによりて出現したのではなくて、彼の生命が上述の特殊なる生理的狀態に到達したからである。實にや生命こそ自己を表出するものである。生命は創作するものである、生命は又附與するのである（Life makes itself manifest,—life Creats,—life gives）。併し一面に又生命は、打勝つべからざる法則によりて制限束縛せらるゝ者なることを忘れてはならない。尤も種の確定せる特性は根本的に變化するものでなく、唯多少の變遷を見るのみである。

上述の概念即ちド・ブリー氏の潑溂たる創見より成れる激變說は、又教育の限界を說明する事が出來る。

吾等は境遇の如何に應じて多少の變化を惹起することが出來る。併し其の範圍は種幷に個體の變化に於て甚だ輕微なものである。されば吾等は到底激變其の物を惹起す事は出來ない、激變は生命其の物の眞の淵源に附屬せる神秘なる紐によりて束縛せられて居る。而して彼等の力は境遇の變化以上に卓出するものである。例へば某種は順應の如何なる現象に依るも、他の種に變ずる事の出來ないのは、恰も人間の一大天才は如何なる制限に依るも抑壓すべからず、或は虛僞的教育の形式を以てするも、之を妨ぐる事の出來ないと同樣である。

抑〻個體其の物の生命が不確立にして、軟弱なればなる程境遇の影響を受くること大なるものである。（下等生物程境遇の影響を受くる事大なり）とはいへ境遇は決して無力のものではなく、生命を或は助長し、或は妨